

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 8-8

給食(2)

目次

| | |
|--|----------|
| 要約 | 2 |
| はじめに | 6 |
| 1. 給食の風景 | 7 |
| ●給食の様子 | 7 |
| ●意外に短い給食の時間 | 10 |
| ●給食中の話題 | 14 |
| ●給食中のいたずら・悪さ | 15 |
| 2. 給食時の食事マナー | 19 |
| ●食事マナーの大切さ | 19 |
| ●給食のきまり | 25 |
| 3. 子どもの好き嫌い | 28 |
| ●好きな物・嫌いな物 | 28 |
| ●嫌いな物が出たら | 30 |
| 4. 子どもの給食観 | 33 |
| ●子どもたちの食事観 | 33 |
| ●プラスの評価が多い給食観 | 35 |
| ●心に残る給食 | 39 |
| ●もっと自由な給食を | 43 |
| まとめに代えて | 46 |
| 地球社会の子どもたち ⑧ アメリカーその2 Goodwill Com. | 深谷昌志……48 |
| 資料1 調査票見本 | 54 |
| 資料2 学年・性別集計表 | 64 |

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

□ □ □

□ 調査レポート □

□ □ 給食 (2)

□ □ □ 要約

□
□ □
□ □
□

放送大学教授 深谷昌志

船橋市立大穴北小学校教諭 新井 誠

千葉市立平山小学校教諭 広森 滋

1. 給食の風景

給食当番が準備し、席はグループごとにすわる。給食中は学校放送をきき、給食が終わると各自が食器をかたづけ、それを当番がまとめて返しに行く。(図1～図6)



2. 食事時間は正味20分

給食の時間は、全部で40分以内が8割を占める。しかし、これから準備と後かたづけの時間を引くと、正味は20分になってしまう。(図7)



3. 給食中の話題ベスト3

一番多い話題は、テレビ番組の話(61%)。以下、友だちのうわさ話(39%)、人気タレントの話(35%)がベスト3といったところ。(図10)



4. 給食中のいたずら・悪さ

最も多いのは、友だちとさわいでいて叱られたことで、74%である。ほとんどの子どもは、給食中のいたずらや悪さの経験はあるが、それはたわいもないものが多い。(図12)

5. 食事マナーの崩れ

「歯をみがく」「口の中に食べ物を入れて話さない」などの食事マナーの大切さはわかっているが、実行できないでいる子が多い。(図15、図16)

6. 給食のきまり

学校では、給食の準備やかたづけに関するきまりの割合が高い。(図20)



7. 好きな給食はカレー

1位はカレー。以下、焼きそば、スパゲッティと続き、嫌いな物は野菜類。(表1、表2)



8. 嫌いな物が出たとき

嫌いな物でも自分から全部食べる子は34%。
逆にぜんぜん食べない子は17%。(図23)



9. 子どもたちの食事観

太りすぎなど、食事に対して過敏になっている子どもが約3割、また、好き嫌い・少食・間食などの問題のある子どもも3割程度いる。(図26)

● 調査概要

1. 調査主題 給食

2. 調査視点 飽食の時代とよばれる現代において、給食がどういう役割を果たしているのか、子どもたちの給食に対する目を通し

て探っていききたい。

3. 調査項目 給食の実態、給食中の話題、給食のきまり、給食に対するマナー、衛生的な配慮、給食観、食事観、理想の給食像、好きな献立、嫌いな食品、心に残る献立、など。

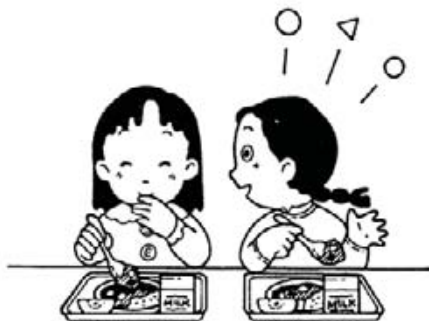
10. プラスの評価が多い給食観

給食はおいしいなど、給食に対してプラスの評価をしている子どもは6割から9割いる。(図27)



11. 理想の給食像

好きな友だちと食べる(95%)、自由に話しながら食べる(94%)、献立を自由に選べる(89%)など、もっと自由な給食を望んでいる。(図31)



- 4.調査時期 昭和63年2月～3月
5.調査対象 東京都周辺の小学校4・5・6年生1,622サンプル
6.調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

| 学年/性 | 男子 | 女子 | 計 |
|------|-----|-----|-------|
| 4年 | 337 | 284 | 621 |
| 5年 | 237 | 214 | 451 |
| 6年 | 289 | 261 | 550 |
| 計 | 863 | 759 | 1,622 |



はじめに

給食前にとってもおなかがすいている子どもは、25%にすぎない（図27参照）。この数字が示すように、現代の子どもたちの飽食状況の中であって、学校給食も曲がり角に立たされているのかもしれない。戦後、給食は子どもたちの栄養改善に大きな役割を果たしてきた。しかし、こと現代にいたって、今までのスタイルでの給食はその役割を終えたようにも思われる。たしかに最近の豊富な献立を見ると、一昔前の給食に比べて隔世の感がある。だがそれですら、様々な食べ物があふれる現代にあっては、決して魅力的な食事とは言いがたい。

こういった給食を取り巻く状況を考えると、今、子どもたちが、給食をどうとらえているのか興味をわいてくるところである。

本号では、子どもたちの給食に対する意識を明らかにするとともに、それを通して、これからの給食の進むべき道を、少しでも探れればと考えている。

なお、調査対象は東京周辺の4年生から6年生、1,622名である。調査時期は昭和63年の2月～3月である。

1. 給食の風景



給食の様子

はじめに、子どもたちが給食をどのように食べているのか、給食の様子をスケッチ風に見てみよう。

図1は、給食を食べる場所をみたものである。①「毎日教室で食べる」が99.5%とほぼ100%に近い数値を示している。最近空き教室にランチルームを設けている学校が増えてきており、調査対象校の中にもランチルームを持っている学校が何校かあるが、あまり活用されていないように見える。この結果は、給食の研究校は別として、調査対象校に限らず一般の学校にもあてはまるように考えられる。

図2は、給食を一緒に食べる人についてみたものである。ここでは、「グループ(班)で食べる」が約90%と圧倒的に高い数値を示している。なお、「ひとりで」と「好きな友だ

ちと」は、それぞれ約5%にすぎなかった。また「ちがうクラスの人と」や「ちがう学年の人と」は、ほとんど0%に近く、前の図1のランチルームの結果を裏づけている。

次に図3と図4は、それぞれ給食の準備と後かたづけについてみたものである。準備と後かたづけの方法については、クラス単位で違いがみられるが、図をみる限り、当番制が主流を占める。給食当番が準備をし(図3・95%)、食べ終わったら各自が後かたづけ、当番がそれをまとめて給食室へ返す(図4・74%)という形が最もポピュラーのようである。

図5は、給食中に学校放送があるかどうかたずねた結果である。図をみると80%が「毎日ある」と答えており、全く「ない」という学校はわずか6%である。ほとんどの学校では、給食中に学校放送が行われているといえ

よう。

なお念のために土曜日以外に、お弁当持ちの日があるか調べてみたが、図6で示したように、特別な場合（短縮日課とか遠足とか）

を除いて、全くないようである。

さてここまでの様子を簡単にまとめてみると、次のような給食風景が目に浮かんでくる。給食のチャイムが鳴ると、白衣をつけた給

図1 給食を食べる場所

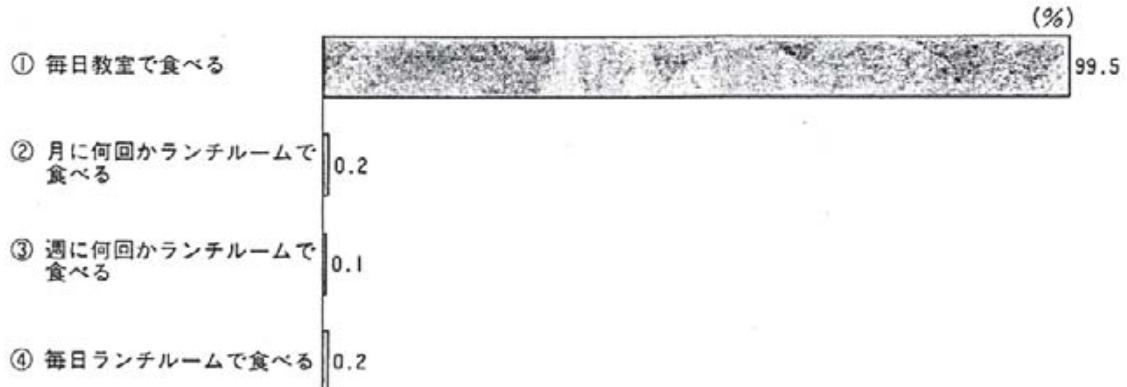
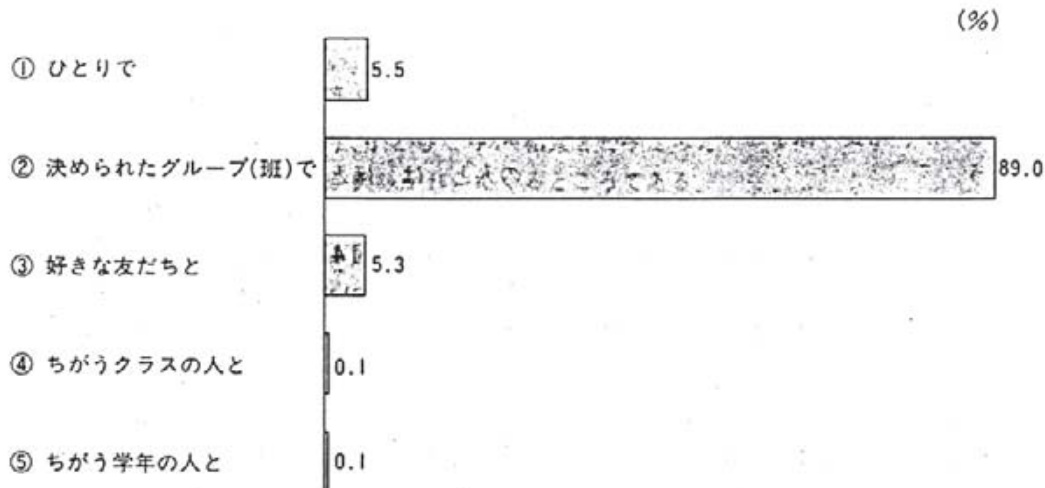


図2 給食を一緒に食べる人



食当番がいそいそと準備を始める。教室の机はグループごとに並び替えられ、子どもたちはクラスの友だちとその席につく。給食中は学校放送が行われ、食べ終わると、各自が食

器の後始末をする。給食当番は集められた食器類を整理して、所定の場所まで運んでいく。これが、最も多くの教室で見られる給食の風景である。

図3 給食の準備

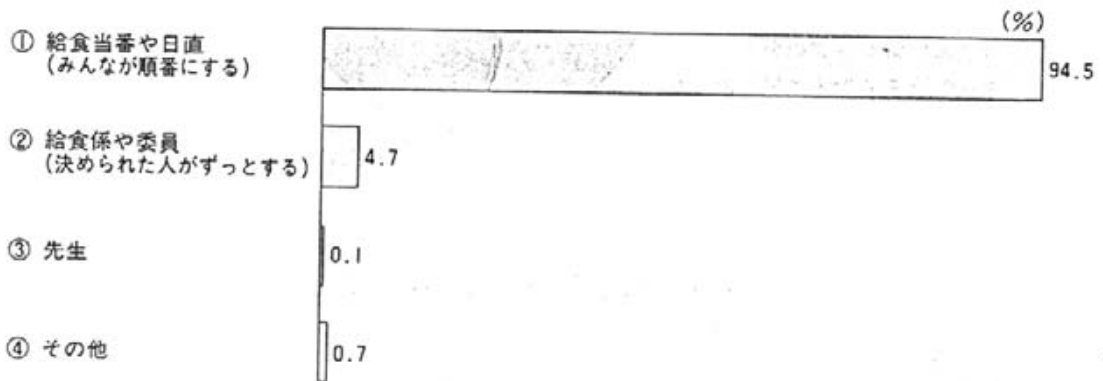


図4 給食の後かたづけ

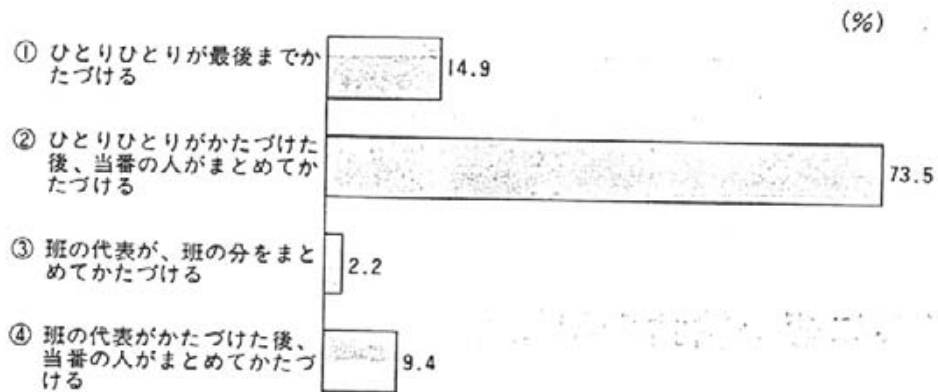


図5 給食中の学校放送

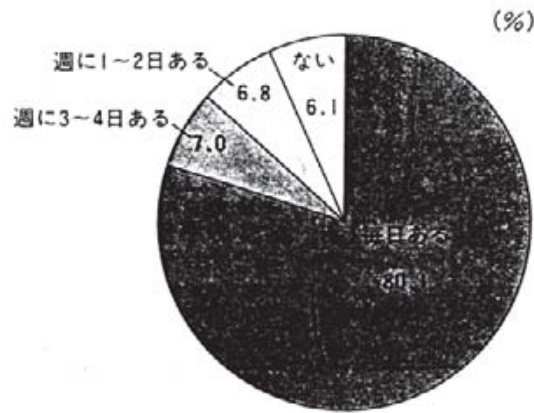
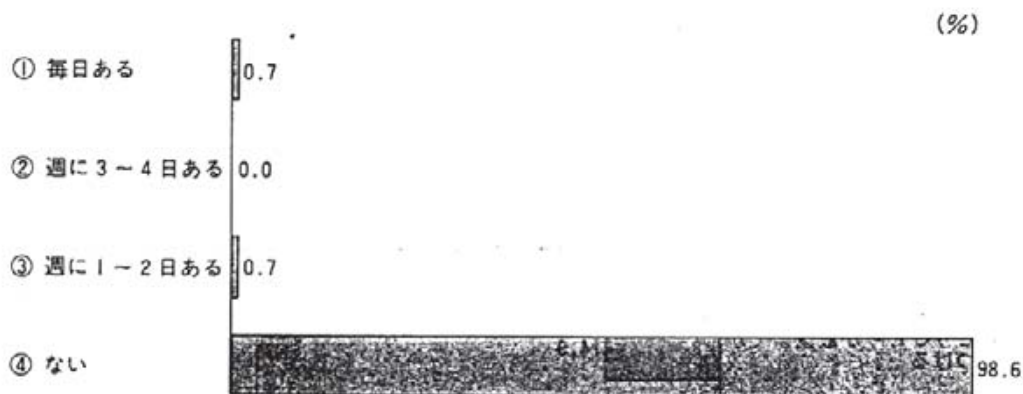


図6 土曜日以外のお弁当の日



意外に短い給食の時間

給食の様子がだいたいわかったところで、次にその時間に目を向けてみよう。

図7は、給食を食べる時間についてたずねた結果である。①の「給食の時間は全部で何分あるか」という質問に対しては、「31～40分」が最も多く40%、次いで「30分以内」が37%である。この2つを加えると8割近くに達することから、ほとんどの学校の給食の時

間は、40分以内ということになる。40分という長いように思えるが、この中には準備と後かたづけの時間も含まれている。仮に、準備に15分、後かたづけに5分かかったとしよう。正味、食事に使える時間は20分になってしまう。果たして、②の「給食を食べるのにかかる時間」をみてみると、20分以内が合計して79%と、ほぼ8割を占めている。なかに

は、10分以内で食べる子ども（13%）もあり、子どもの食事時間としては短すぎるように思える。

子どもの中には、生活リズムのゆっくりとした子どももいる。③の「給食を食べる早さ」をしてみると、24%の子どもがみんなより食べるのが遅いと感じている。こういった子どもたちにとって、正味20分以内の食事時間では、あまりにかわいそうな気持ちにする。せわしなさすぎて、食べた気もしないのではなかろうか。

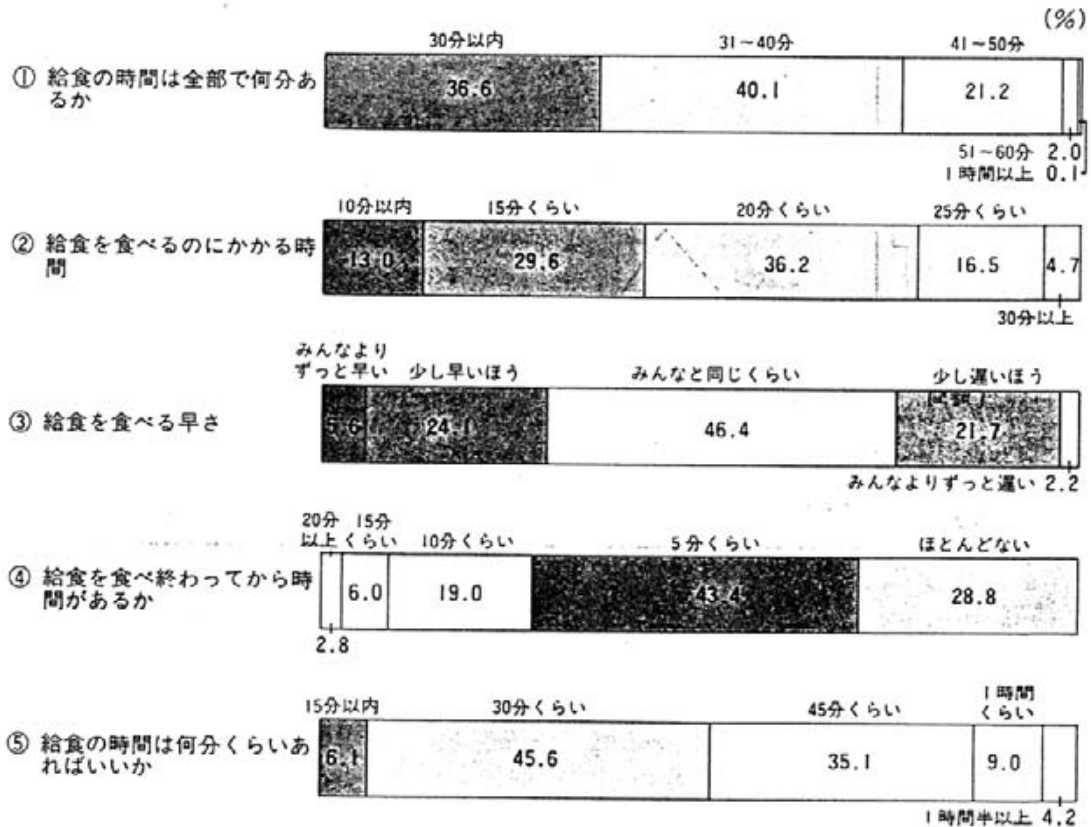
食事の後は、しばらく休憩をとるのがよいとされるが、④の「食べ終わった後の休憩時間」をしてみると、これもまたほとんどないのが実態のようである。図中、「ほとんどない」が29%、「5分くらい」が43%。この2つを加えると7割以上に達する。

では子どもたちは、この短い給食時間に満足しているのだろうか。⑤の「給食時間は何分くらいあればいいか」をみると、もっと時間を欲していることがわかる。次の図8は、図7の②(実際)と⑤(期待)の差をわかりやすく、ひとつにまとめたものである。図中、実線が示すように、食べるのにかかる実際の時間のピークは20分である。これに対して、破線が示す期待の時間のピークは30分である。子どもたちの「せめてもう10分長くしてほしい」という声が聞こえてきそうである。

なお図9は、給食を食べる時間の性差をみたものである。②～④をみてわかるように、女子の方が男子より、食事に時間がかかるようである。

学校全体のカリキュラムを考えると、現在の給食の時間がぎりぎりの線なのかもしれな

図7 給食を食べる時間



い。しかし、ひとりひとりの子どもを大切に
 する教育の必要性が問われている現在、ゆっ
 くり食事をする子どもをせかせてまで、全体
 の生産性を上げる必要があるのであろうか。

もし、給食にこれ以上の時間をかけられない
 のならば、現在の給食システムそのものを根
 本的に考え直さなければいけないのかもしれ
 ない。

図8 ②給食を食べるのにかかる時間(実際) × ⑤給食の時間は何分くらい
 あればいいか(期待)

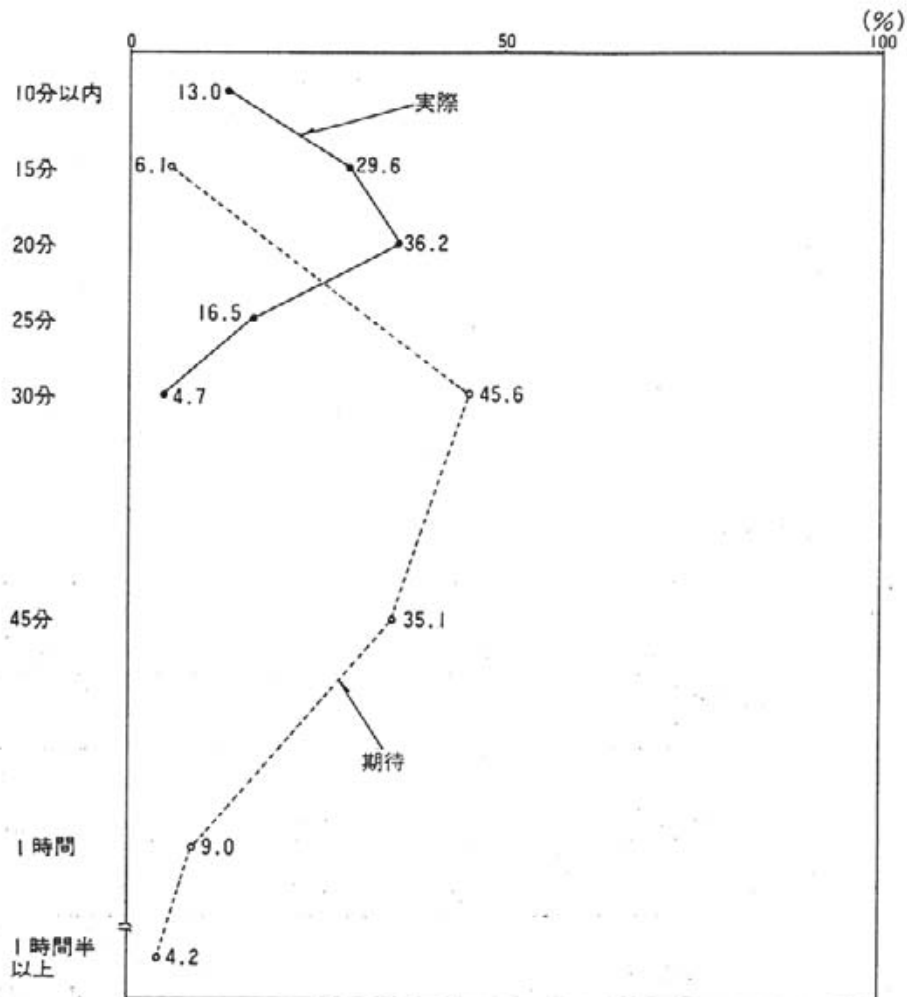
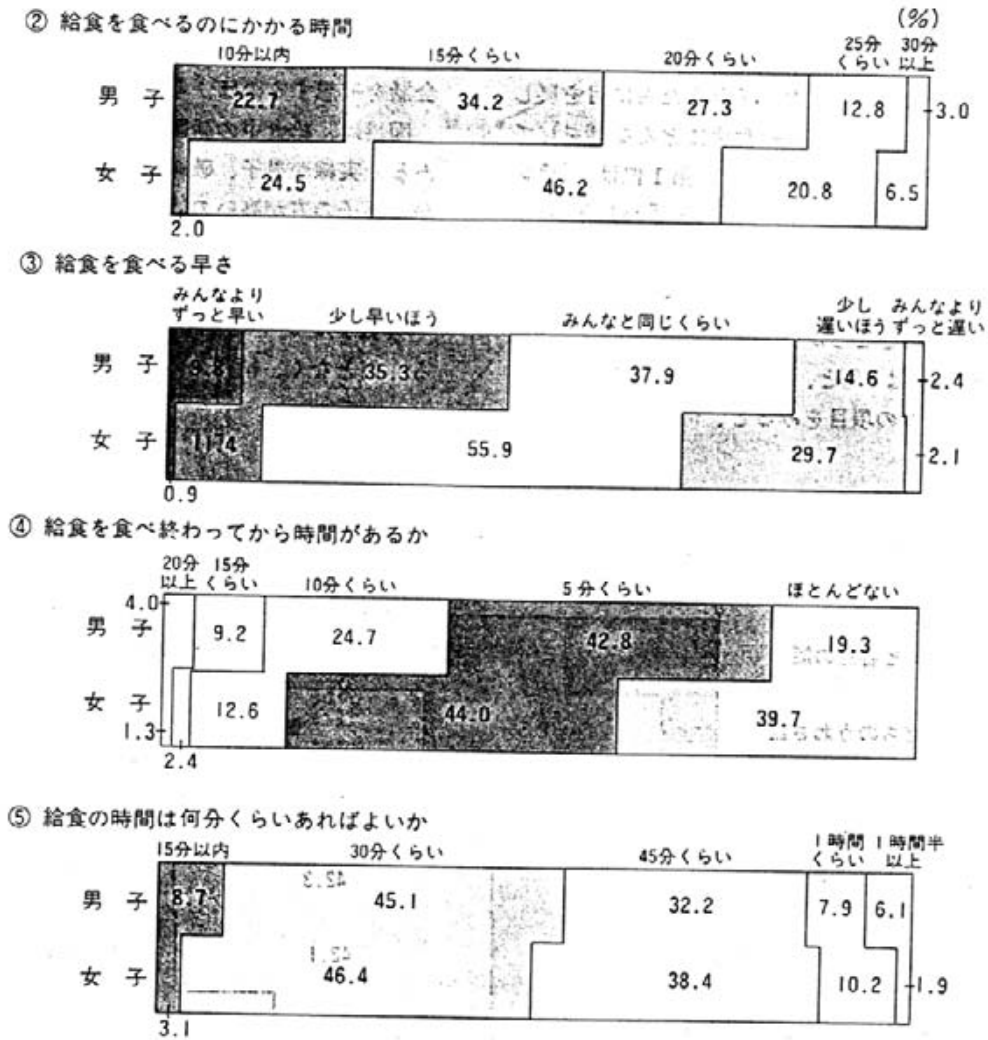


図9 給食を食べる時間×性差



給食中の話題

この辺で、給食中の子どもたちに目を戻してみよう。図10は、給食中にどんな話をしていのか調べた結果である。第1位は、「テレビ番組の話」（「とても多い」と「わりと多い」を加えると61%）である。以下、「友だちのうわさ話」（39%）、「人気タレントの話」（35%）といったところがベスト3に入る。逆に「勉強の話」は5%と、さすがに低い。ここで、上位の3つの項目をみると、何やら主婦たちの

会話を連想するのは、考えすぎであろうか。

図11は、給食中の話題の性差をみたものである。実線が男子、破線が女子を表しているが、男子の方が高いのは、「テレビ番組の話」と「ファミコンの話」である。これに対して、女子の方が高いのは、「友だちのうわさ話」「人気タレントの話」「家での出来事」である。何となく、納得のいく結果である。

図10 給食中の話題

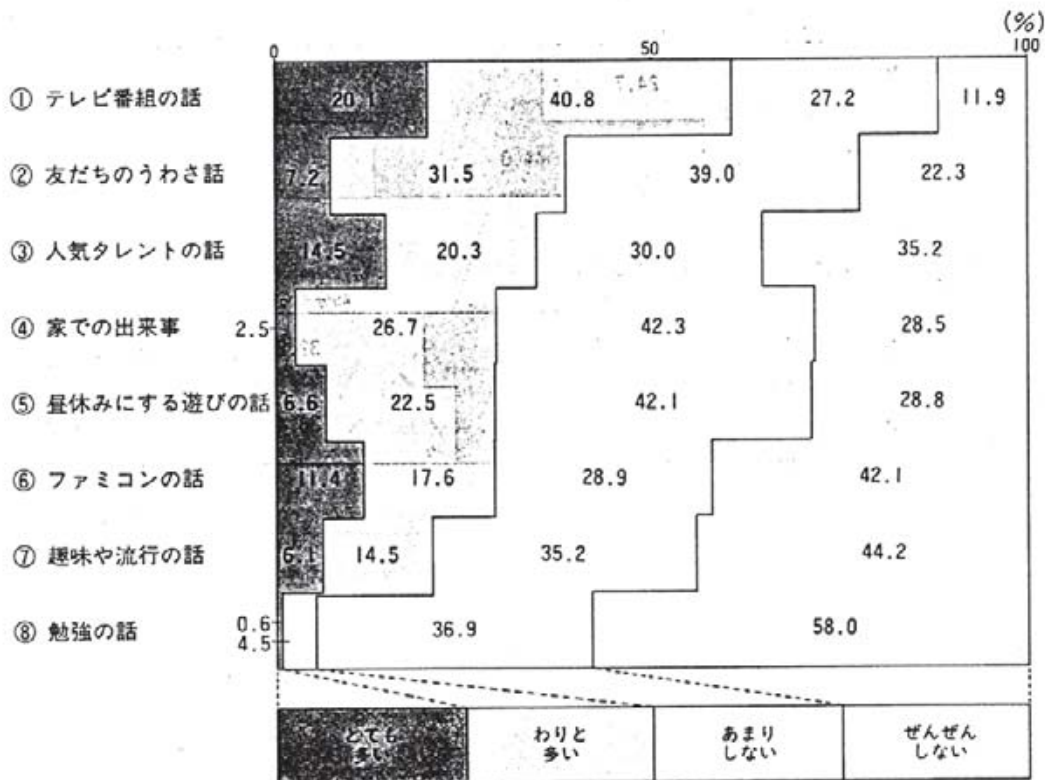
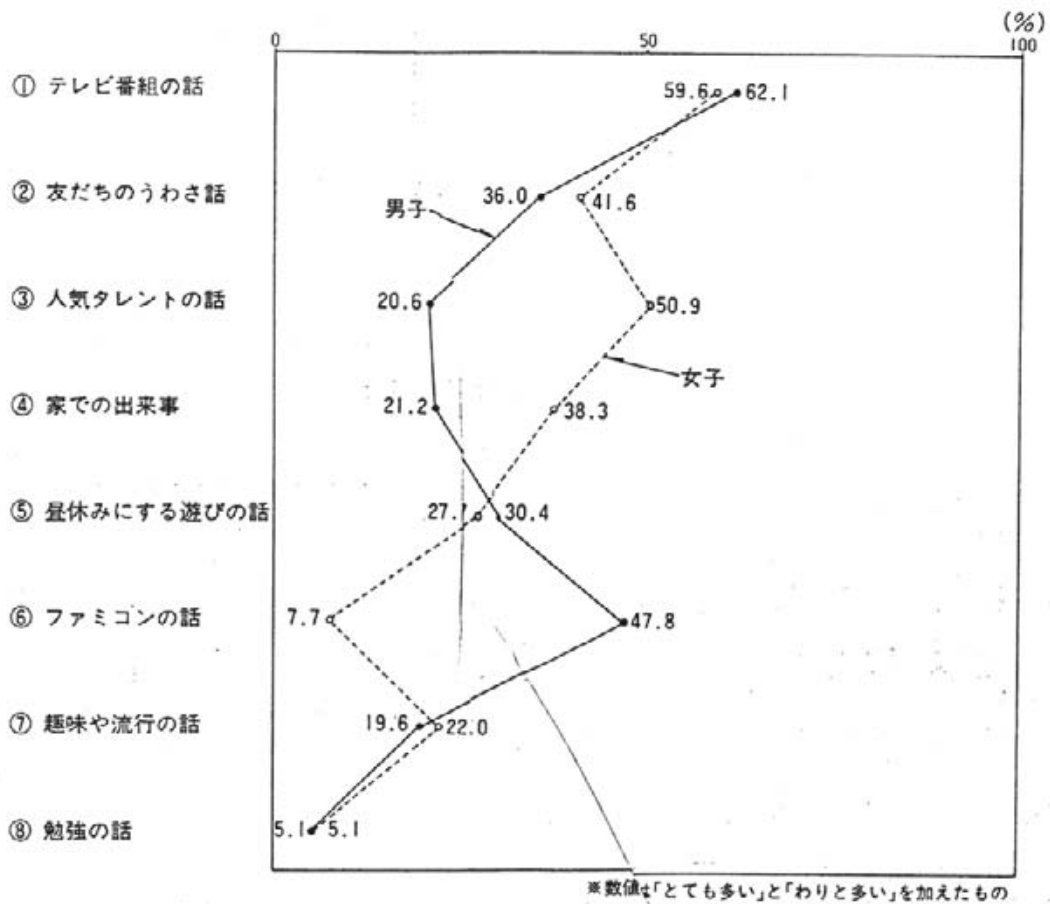


図11 給食中の話題×性差



給食中のいたずら・悪さ

本章の最後に、給食中の子どもたちの姿をネガティブな面からみてみようと思う。図12は給食中のいたずらや悪さの経験をたずねた結果である。一番多い悪さは、「友だちときわいていて叱られたこと」の74%（「たくさんある」から「何回かある」までを加えたもの）である。以下、②「友だちが牛乳を飲むときに笑わせたこと」の67%、③「話に夢中になって、時間内に食べ終わらなかったこと」の63%、④「友だちからパンやデザートなど

をもらったこと」の5%、⑤「早飲み、早食いの競争をしたこと」の7%と続く。③の「話に夢中になって、時間内に食べ終わらなかったこと」に、給食時間の短さが顔を出しているようで気にかかるが、どの項目もたわいもないいたずらや悪さばかりである。

反対に、下位に並んでいる項目をみると、⑪「教室を抜け出したこと」(2%)、⑫「まんがをこっそり見ていたこと」(1%)、⑬「後でこっそり食べたこと」(1%)を学校生

活のルールを無視した項目である。

ほとんどの子どもに、給食中のいたずらや悪さの経験はあるが、それはたわいのないものばかりだといえよう。

図13は、給食中のいたずらや悪さの性差をみたものであるが、やはり男子の方が女子より、悪さの経験が豊富なようである。13項目中、12項目で男子の数値の方が高くなっているが、③「友だちと話に夢中になって……」という1項目だけ女子の方が上まわっている。

日頃の子どもの様子を見ていると、まさにその通りでなるほどと思う。

図14は、同様に学年差をみた結果である。6年生の方が全般に高い数値を示しているが、⑤「早飲み、早食い」、⑥「おかわりで文句を言われたこと」、⑦「わざと変わった食べ方をしたこと」の3つの項目で4年生の方が上まわっている。⑤～⑦の悪さは、4年生らしい悪さと言えと言えないこともなかろう。

図12 給食中のいたずら・悪さ

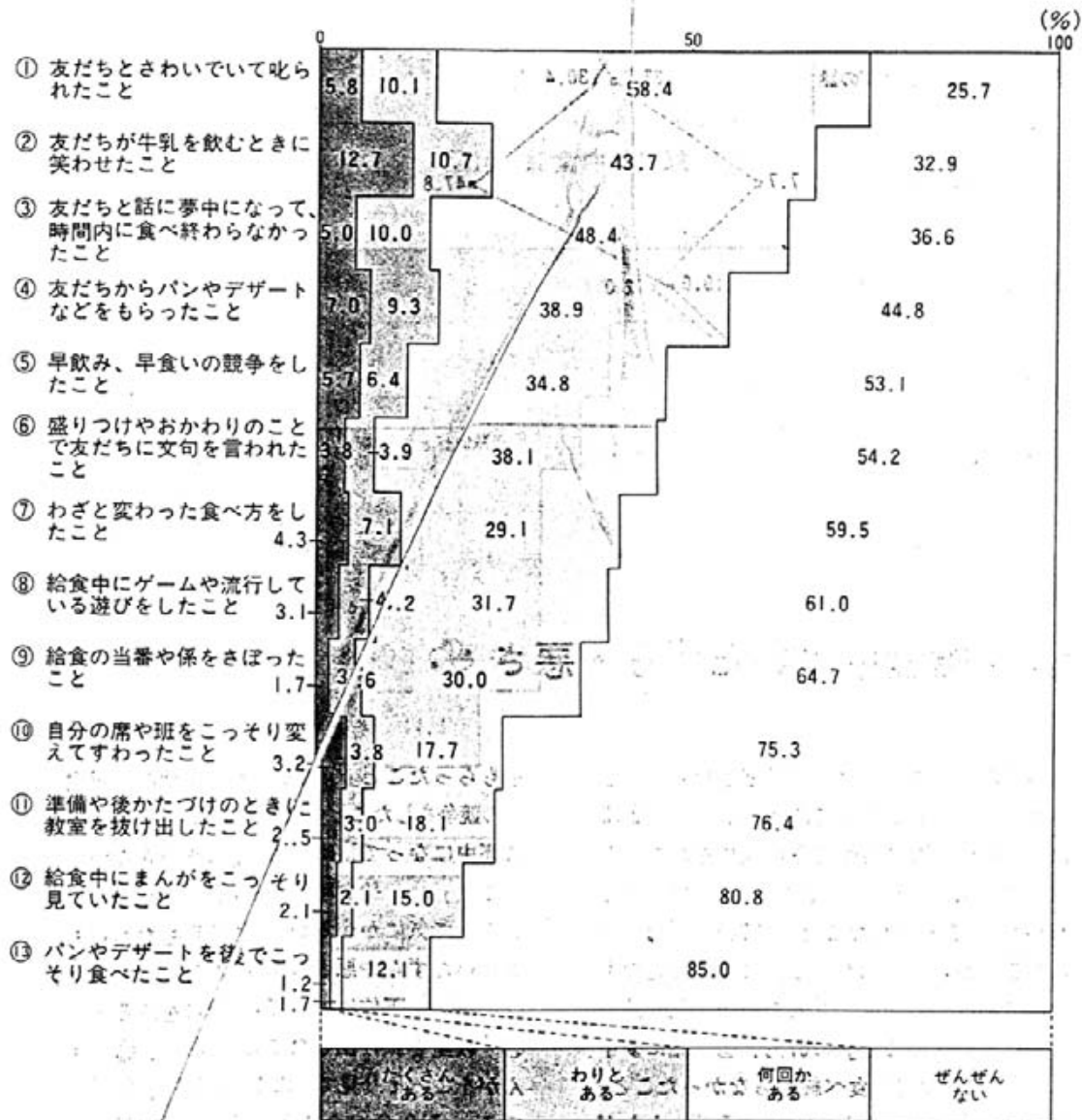
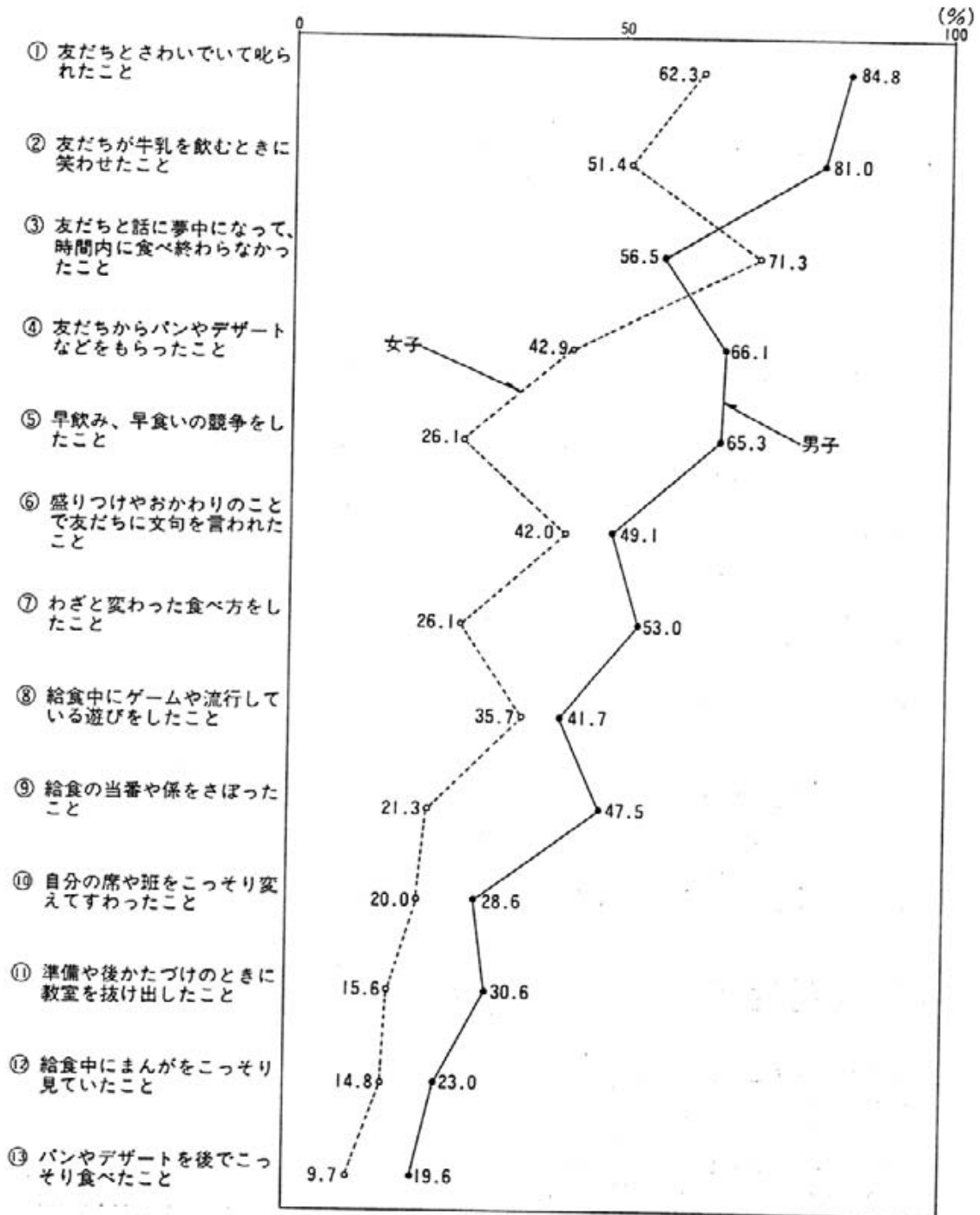
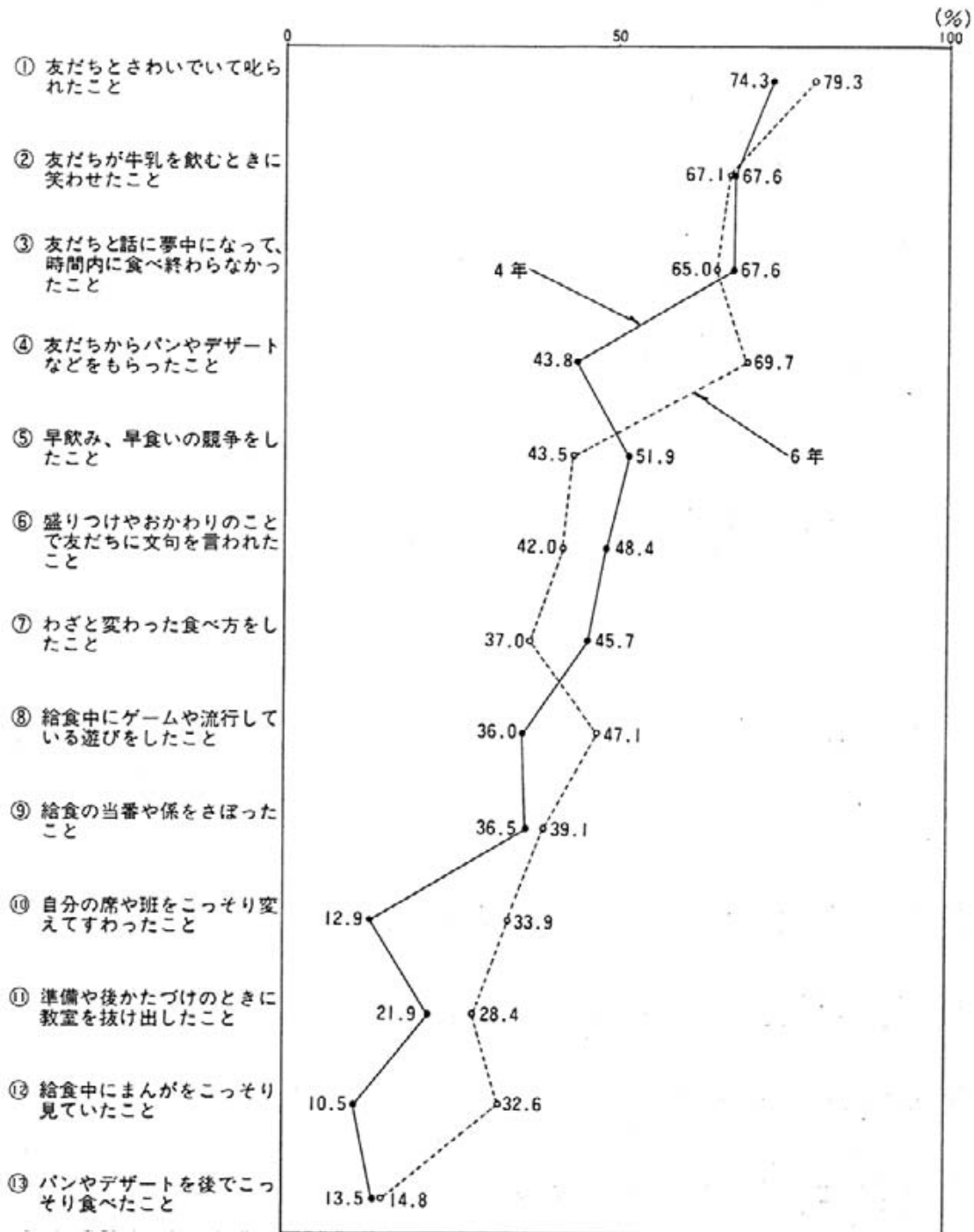


図13 給食中のいたずら・悪さ×性差



*数値は「たくさんある」と「わりとある」と「何回かある」を加えたもの

図14 給食中のいたずら・悪さ×学年差



※数値は「たくさんある」と「わりとある」と「何回かある」を加えたもの

2. 給食時の食事マナー



✿✿ 食事マナーの大切さ ✿✿

給食風景を探るなかで、多くの子どもが、給食中にたわいのないいたずらや悪さを経験していることが明らかになった。

それでは、子どもたちは給食時の食事マナーについて、どのような意識を抱いているのだろうか。図15は子どもに、食事マナー15項目について、どのくらい大切と思うかをたずねた結果である。子どもたちが一番大切と思う食事マナーは「給食の前に手を洗う」で「とても大切」と答えた子は68%である。以下、「好き嫌いをしない」(62%)、「食器をきちんとかたづける」(57%)と続くが、どの項目も大切と思う子の割合は高く、「あまり・ぜんぜん大切でない」という子の割合は、1～2割にすぎない。

とても食事マナーを大切と思っている子どもたちだが、実際にそうしたマナーをどのくらい実行しているのだろうか。それを調べたのが、図16である。図が示すように、「とても大切」と感じているほどには、「いつもして

いる」の割合は必ずしも高くない。「いただきます・ごちそうさまをきちんと言う」「給食の前に手を洗う」「友だちと楽しく話しながら食事をする」「食器をきちんとかたづける」の上位4項目は、かなり実際にも実行されているが、「食器をていねいに使う」から「食べた後歯をみがく」までの11項目で「いつもしている」の割合は低く、ほとんどが1割前後である。

相手に迷惑をかけないということが食事マナーの基本的ルールであるが、図中の下位の項目に、「食事中、きたない話をしない」「食事中、立ち歩かない」「口の中に食べ物を入れて話さない」といった周囲の子に迷惑を与えるだろうと思える項目が多いことは気がかりである。大切だとは思っていても、現実にはなかなか実行に移せないあたりが、給食指導上の難しさでもあるのであろう。

図17は、食事マナーの実際の性差をみたものであるが、それほど男女差は感じられない。

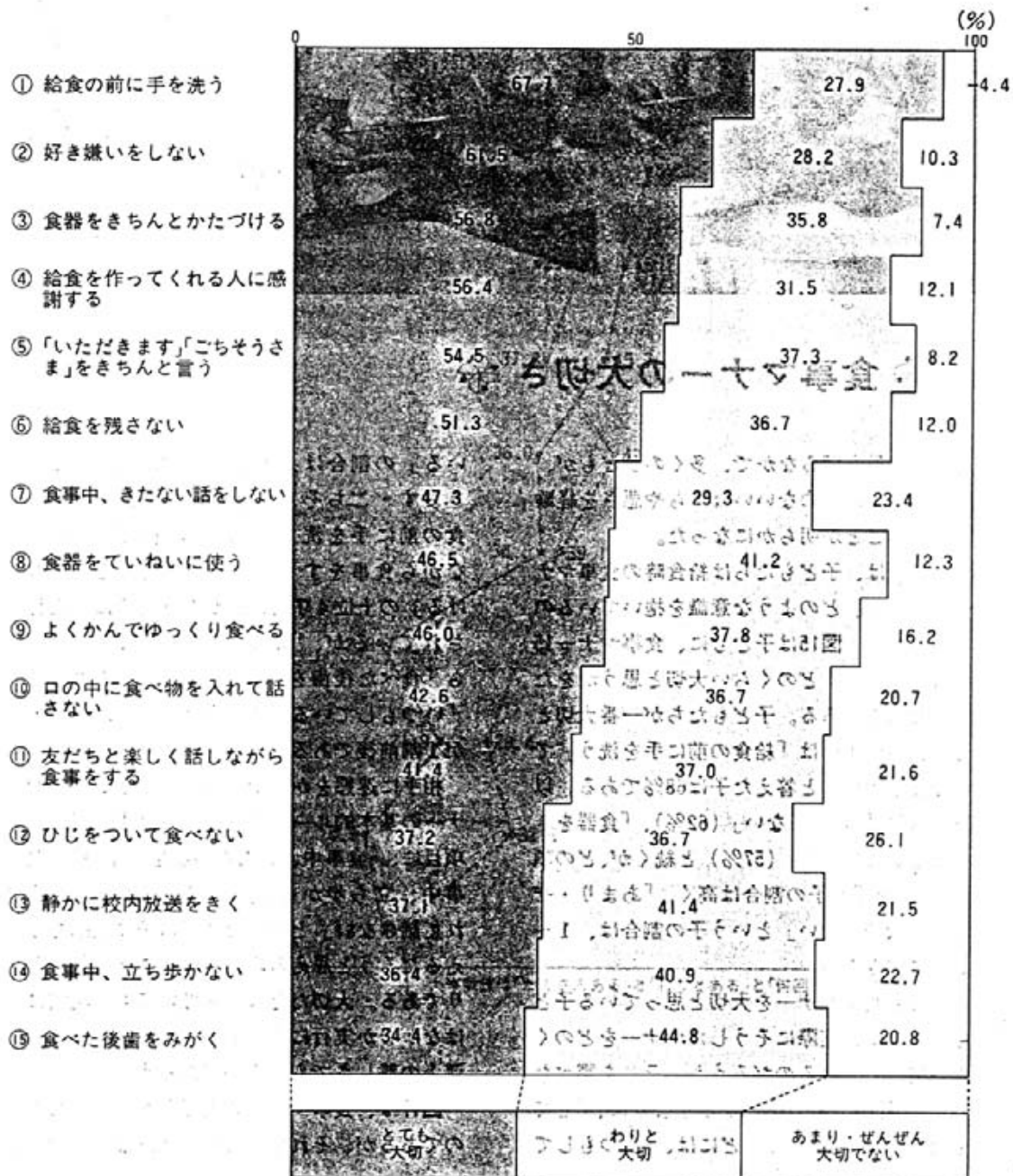
現代は女子だからといって、家庭で食事マナーを厳しくしつけるということもなくなってきているのであろう。

図18は、同様に学年差をみた結果である。「いただきます・ごちそうさまを言う」割合は4年生の方が高く、「給食の前に手を洗う」は6年生の方が高いが、他の項目はほとんど

差がない。学年が上がれば、食事マナーが身につくということもないようである。

食事マナーの意識と実際の行動のデータを対比させて、そのズレをみようとしたのが図19である。意識よりも実行率が高い順に並べてある。図から明らかなように、「いただきます・ごちそうさまをきちんと言う」「友だ

図15 食事マナーの大切さ



ちと楽しく話しながら食事をする」の2項目は、「とても大切」と思う以上に「いつもしている」ようである。しかし、「食器をきちんとかたづける」以下の13項目では、意識に行動が伴わないことがはっきり示されている。なかでも「好き嫌いをしない」「給食を作ってくれる人に感謝する」「給食を残さない」「食事中、きたない話をしない」「よくかん

でゆっくり食べる」などは意識と行動に35%以上の開きがある。今の子どもは、「好き嫌いをしない」といった自制心を要求されるものは、わかっているからと言っても行動に結びつきにくいようである。また、給食は毎日繰り返されるだけに、ついつい感謝の心を忘れてしまうようである。

図16 食事マナーの実際

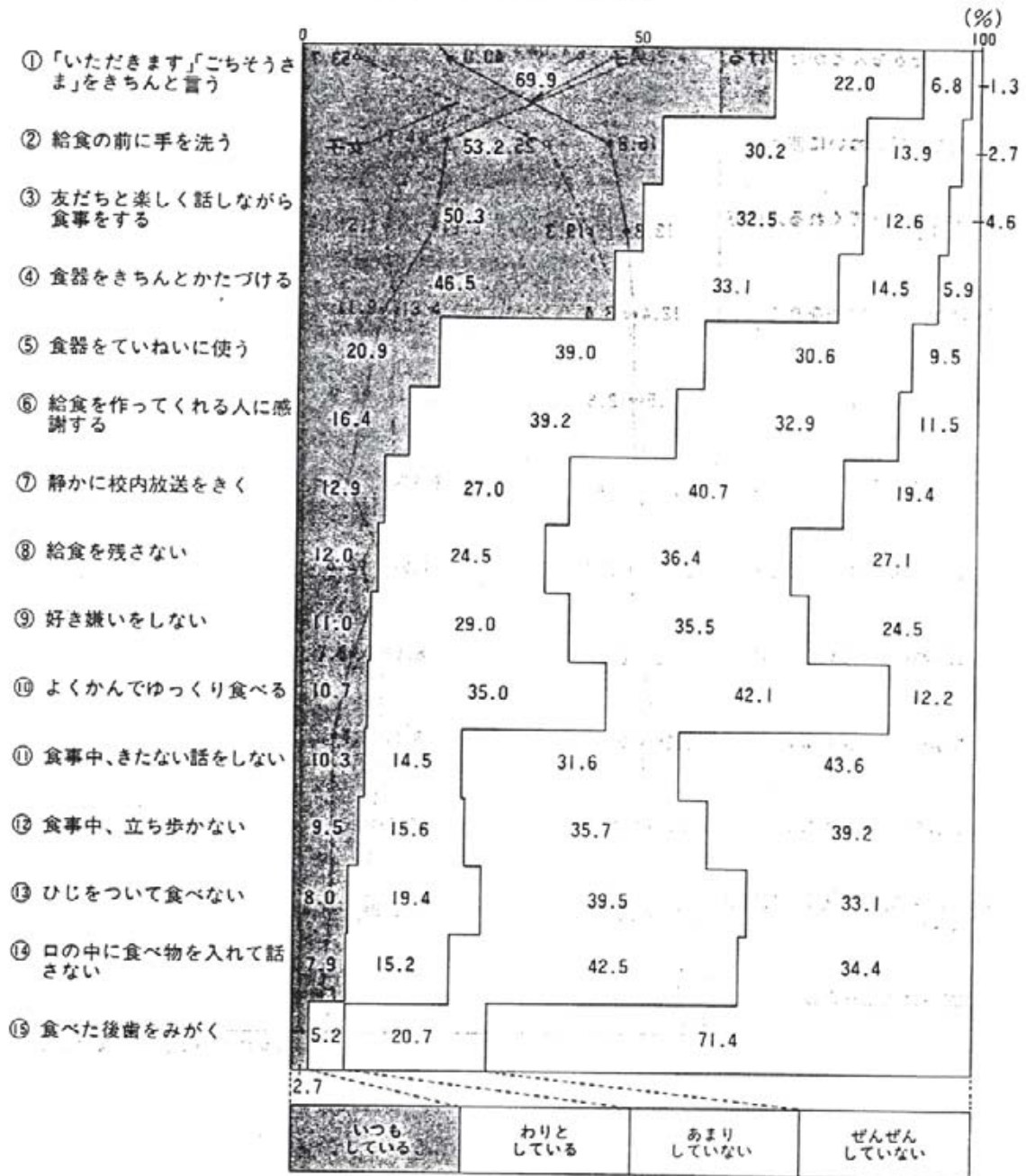
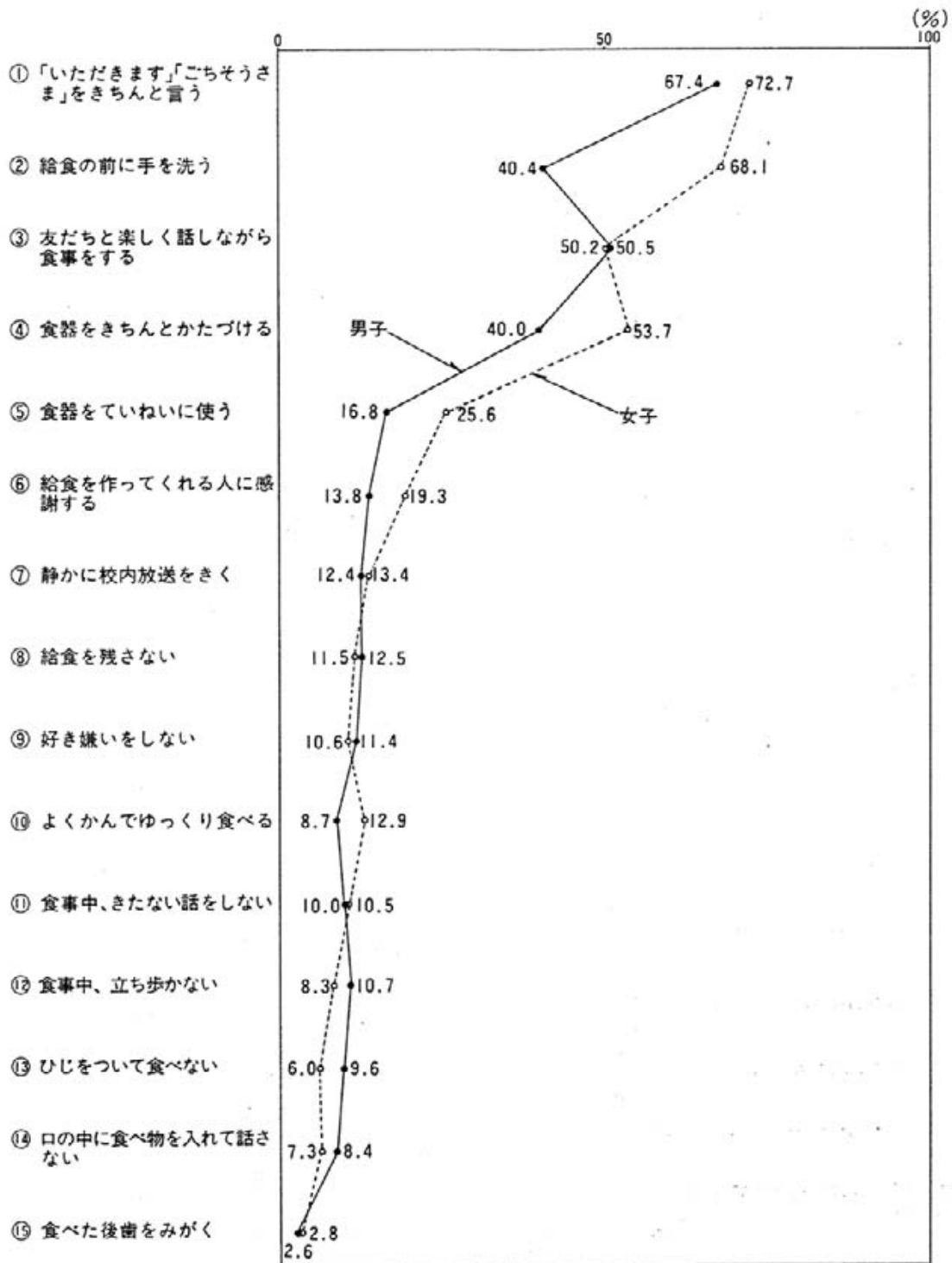


図17 食事マナーの実際×性差



※数値は「いつもしている」の割合

図18 食事マナーの実際×学年差

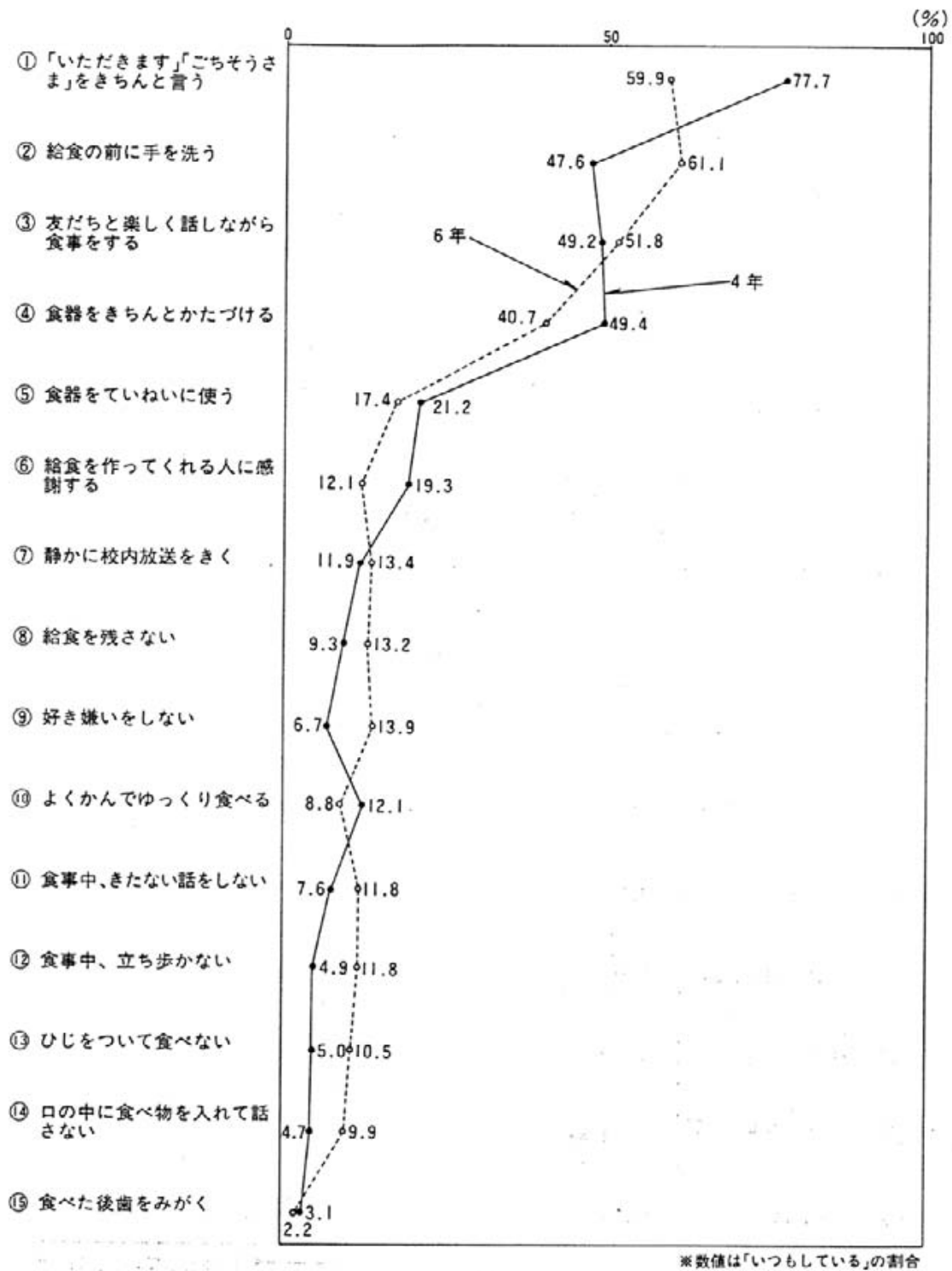
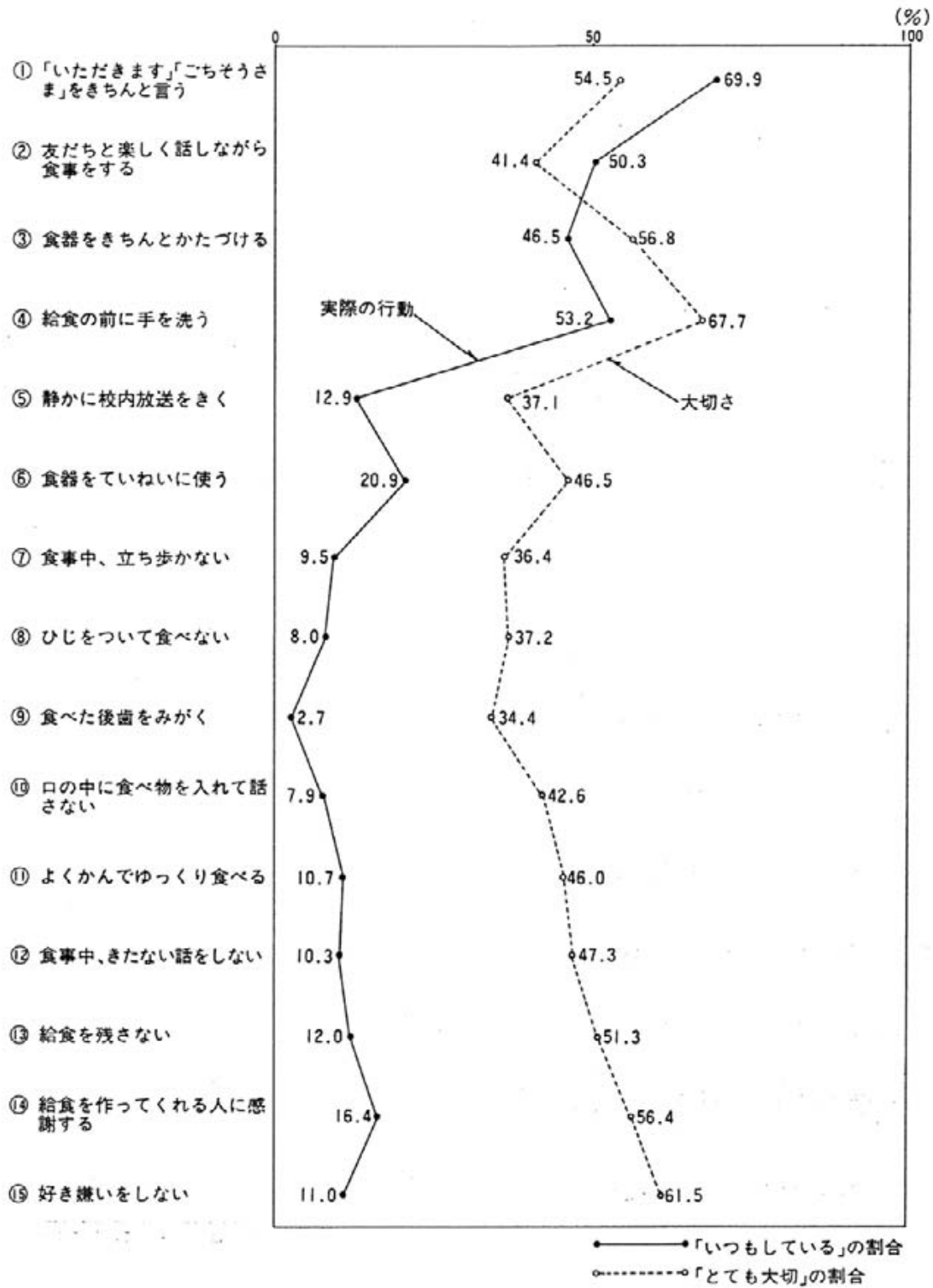


図19 食事マナーの意識と行動のズレ



給食のきまり

戦後、学校給食は子どもたちの栄養補給を主眼として開始されたが、現在のように食生活が豊かな時代になると、「学校給食を通してどのような食事文化を伝達しようとするか」ということが大きなテーマとなってくる。そこで、子どもたちの食事マナーの意識と実際の行動が明らかになったところで、学校では、子どもたちの望ましい食習慣の形成のために、日頃どのような指導をしているのか調べてみよう。

図20は衛生面や健康面、給食中の態度などに関する21項目について、学校ではどのくらいきまりを作って指導しているのかをたずねた結果である。きまりがある頻度の高い順に並べてみたのだが、「ごちそうさまをするまでは遊びに行ってはいけない」「給食当番は白衣を着る」「決められた時間になるまでは、食器をかたづけてはいけない」が上位を占め、その割合は7割から8割を超える。以下、「ナブキンを用意する」「係の人が、先生の給食を準備する」「給食前は手を洗う」が続く。給食の準備やあいさつ、かたづけに重点を置いて指導していることがうかがえる。しかし、これらのことはきまりを作り、ときには罰を与えるという形で指導すべきことなのだろうか。きまりという形をとらなくても、日常の給食指導の中で、ほめたり、注意したりしていく中で気づかせていくことができるように思える。

また少数ではあるが、「給食を食べているときは、話をしてはいけない」「パンや牛乳やおかずは交互に食べる」ということまでもきまりを作っているところがある。相手の迷惑にならないように、バランスよく何でも食

べさせたいという意図だとは思いますが、食べ方までもきまりで規制すると、かえって食事本来のくつろぎや楽しさを阻害し、教育上好ましくない結果を及ぼすのではないだろうか。

さて次に、給食のきまりの学年差をみると図21である。⑤の「係の人が、先生の給食を準備する」を除いた20項目で、6年生の方が4年生よりも「とくにきまりはなく自由」な割合が高い。学年が上がるにしたがって、きまりという形は少なくなるが、だからといって6年生の方が、食事マナーが身についているかという点、図18で紹介したようにそうとはいえない。きまりで管理的に指導することも問題だが、そうかといって、ただ「自由」にすればいいということでもないようである。

これまでのデータをみていると、学校としては、準備やかたづけ、あいさつなど給食を円滑に進めるための食事マナーの指導に力を入れ、子どもたちの実行率も高い。しかし子どもたちが、集団の一員として同じ食事をもとにとるという体験を通し、好ましい人間関係を作ったり、相手を思いやる心を育てるといった面での食事マナーの指導が十分でないような感触を受ける。相手の立場に立った食事マナーは、きまりによってあらかじめ決められていることを決められた通りにやるというだけでは育たないだろう。子どもたちが、相手の行動を自分の在り方と関わらせて考え、行動に移せる自由な給食の場と、きまりに頼らない、子ども同士の相互作用を大切にしたい一貫性のある給食指導のあり方を考えていく必要があるようである。

図20 給食のきまり

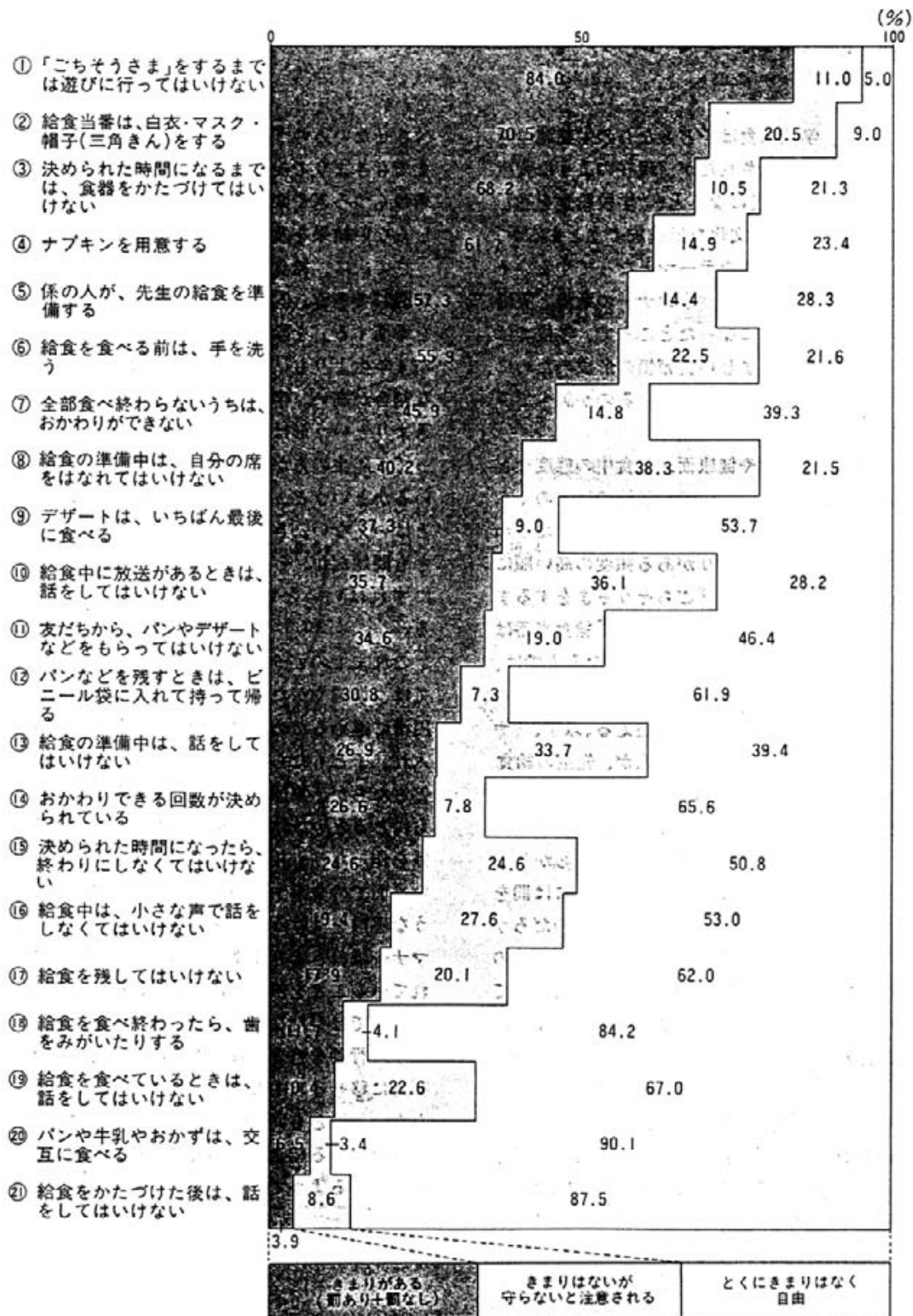
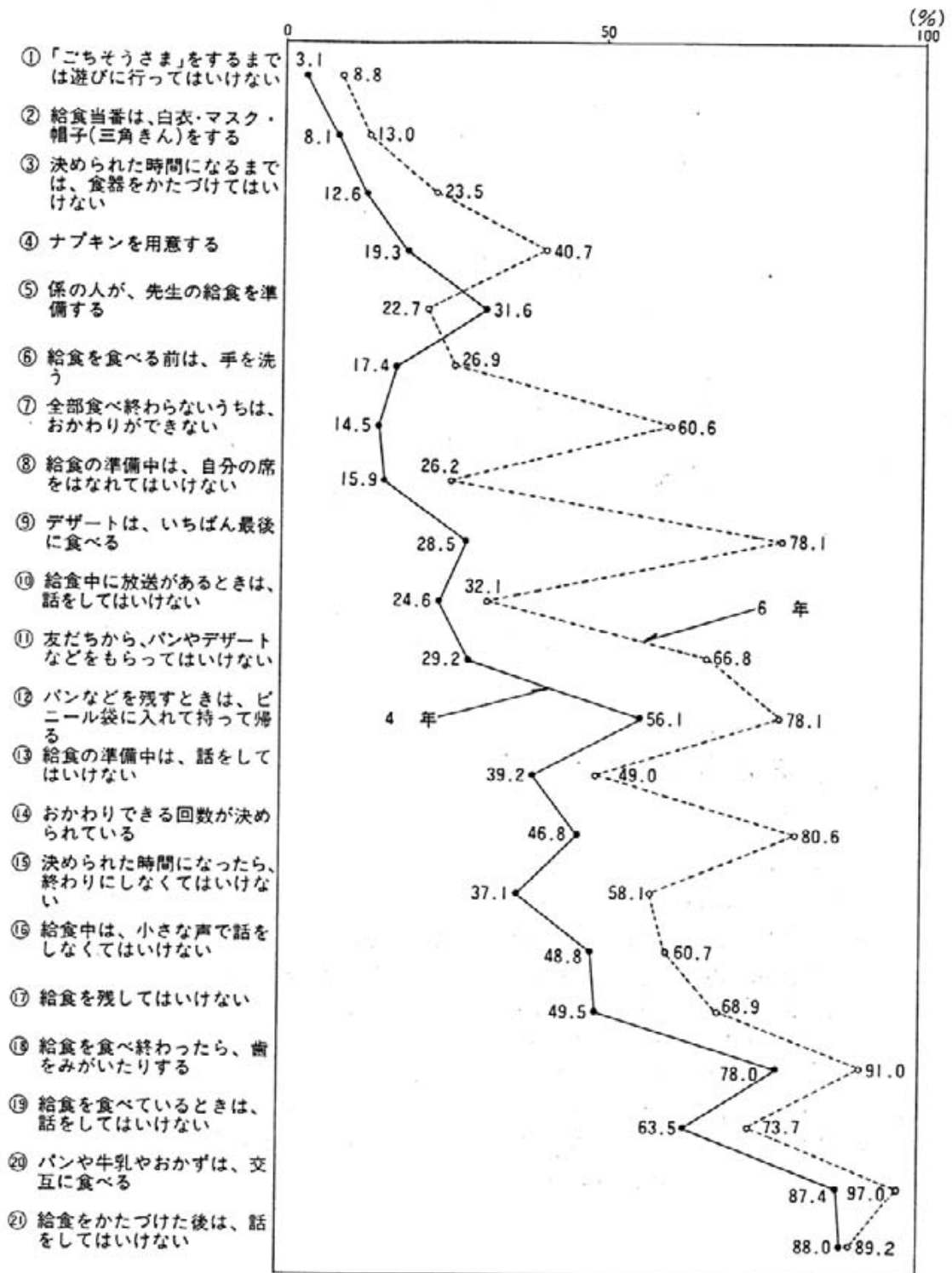


図21 給食のきまり×学年差



*数値は「とくにきまりはなく自由」の割合

3. 子どもの好き嫌い



❀❀ 好きな物・嫌いな物 ❀❀

2章で報告したように、食事マナーの意識と行動のギャップが一番あったのが「好き嫌いをしない」であった。豊かな時代に生まれて、およそ飢えの味を知らない子どもたちだが、彼らの好きな給食、嫌いな食べ物があるものなのか、表1と表2に目をとめて欲しい。

表1からわかるように、子どもが好きな給食は、カレー、焼きそば、スパゲッティが上位ベスト3である（詳しくは、巻末資料参照）。いわゆるスナック料理が、男女、学年を

問わず好まれている。最近の子はあまり空腹感を感じなくなっているためか、軽い物を好む傾向を示している。クレープ、ケーキ、ゼリー、フルーツなどにも人気があるのは、給食を食事というよりおやつ的な感覚でとらえているからではないだろうか。

表2の嫌いな食べ物では、ピーマン、にんじん、グリーンピースを代表とした野菜類が多い。魚、レバーなども不人気である。

表1 好きな給食

| | 男 子 | 女 子 | 4 年 生 | 5 年 生 | 6 年 生 |
|----|---------|---------|---------|---------|----------|
| 1 | カレー | カレー | カレー | カレー | カレー |
| 2 | 焼きそば | 焼きそば | 焼きそば | 焼きそば | 焼きそば |
| 3 | スパゲッティ | スパゲッティ | スパゲッティ | スパゲッティ | シチュー |
| 4 | まぜごはん | シチュー | シチュー | まぜごはん | スパゲッティ |
| 5 | ハンバーグ | まぜごはん | まぜごはん | ミルク | ハンバーグ |
| 6 | シチュー | ハンバーグ | グラタン | シチュー | まぜごはん |
| 7 | ミルク | フルーツポンチ | ハンバーグ | ハンバーグ | ゼリー |
| 8 | フルーツ | グラタン | クレープ | グラタン | フルーツポンチ |
| 9 | グラタン | ケーキ | ケーキ | フルーツポンチ | フルーツ |
| 10 | フルーツポンチ | フルーツ | フルーツポンチ | ケーキ | からあげ、うどん |

表2 嫌いな食べ物

| | 男 子 | 女 子 | 4 年 生 | 5 年 生 | 6 年 生 |
|----|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 | ピーマン | ピーマン | ピーマン | ピーマン | ピーマン |
| 2 | にんじん | にんじん | にんじん | グリーンピース | にんじん |
| 3 | グリーンピース | グリーンピース | グリーンピース | しいたけ | グリーンピース |
| 4 | トマト | しいたけ | 魚 | にんじん | しいたけ |
| 5 | しいたけ | 魚 | ねぎ | レバー | トマト |
| 6 | 魚 | (豚・鳥)肉 | 玉ねぎ | 魚 | 魚 |
| 7 | なす | ねぎ | トマト | (豚・鳥)肉 | 納豆 |
| 8 | レバー | 玉ねぎ | (豚・鳥)肉 | トマト | ねぎ |
| 9 | ねぎ | レバー | ほうれん草 | ねぎ | 玉ねぎ |
| 10 | 玉ねぎ | トマト | レバー | なす | (豚・鳥)肉 |

❀❀ 嫌いな物が出たら ❀❀

では子どもたちの嫌いな食べ物は、給食にどのくらい出るのだろうか。図22をみると、「とてもよく出る」と偏食傾向の強い子が1割。「わりと出る」という子まで含めると約半数の子は、嫌いな食べ物と給食で日頃対面させられているようである。この傾向は男子よりも女子に強い。

しかし考えてみると、食べ物に多少の好き嫌いがあるのは、当然で、その方が人間らしいのかもしれない。問題はそれを、いわば給食という公の場で出されたときに、食べられるかどうかではないだろうか。

さてその子どもたちは嫌いな食べ物が出たとき、どうするのだろうか。図23に掲げたように、「先生に言われなくても全部食べる」がんばり屋が3分の1。「先生に言われなくてもできるだけ食べる」子も3分の1。つまり3人に2人は嫌いだと思ってもがまんして食べているのである。一方、先生に言われても「ぜんぜん食べない」子も17%いる。学年との関連では、4年10%、5年18%、6年25%と学年を追って食べない子どもが増えていく。ふつうは学年が上がれば、適応の幅が広がり、減っていくはずであるが、逆に増えているということは、6年生になり、「好き嫌い」に対してのきまりや注意が減る（図21参照）のをいいことに、自分のわがままを通していていると考えられる。

自分で作って食べる場合は、何を食べようが、食べまいが、それは個人の問題であろう。しかし、食事に招かれたり、多くの人と会食をする場合に、嫌いだからと食べなかったりしたらどうだろうか。相手の心を傷つけたり、楽しい雰囲気を作らずにものになってしまう場合もあるかもしれない。そういう意味で、高学年になるほど、偏食傾向を示すことは、その子の適応性の問題としても、必要な教育的配慮がなされるべきだろう。

また子どもたち自身は、嫌いな食べ物がどうしても口に入らない友だちに対して、どのように接しているかをたずねたのが図24である。

「無理して食べなくてもいいよ」という子が24%、「せめてひと口くらいは食べよう」と励ます子が68%、「無理して食べよう」と強引にせまる子が9%で、女子（3%）よりも男子（14%）に多い。子どもたちは、偏食はない方がいいと思いつつも、相手の立場に近づいて、無理のないように対応しているようである。

同様に、図25で食べるのが遅い子への対応もたずねてみたが、「急いで食べなくてもいいよ」という子が46%、「少しでも早く食べよう」という子が47%と、食べるのが遅いことは、嫌いな物が食べられないほど問題ではないと子どもたちは思っている。

図22 給食に嫌いな物が出るとき

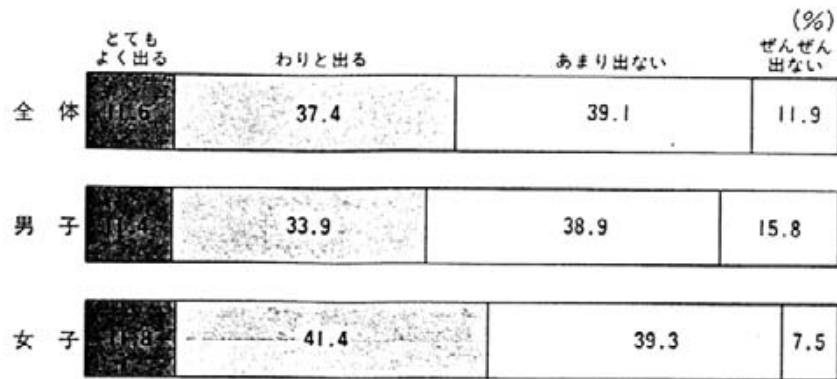


図23 嫌いな物が出たとき

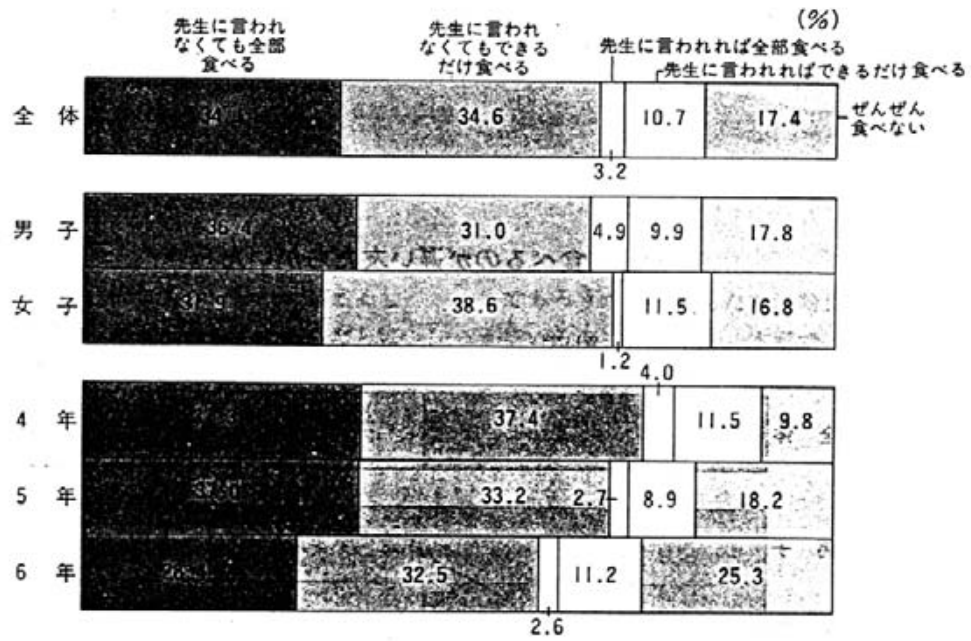


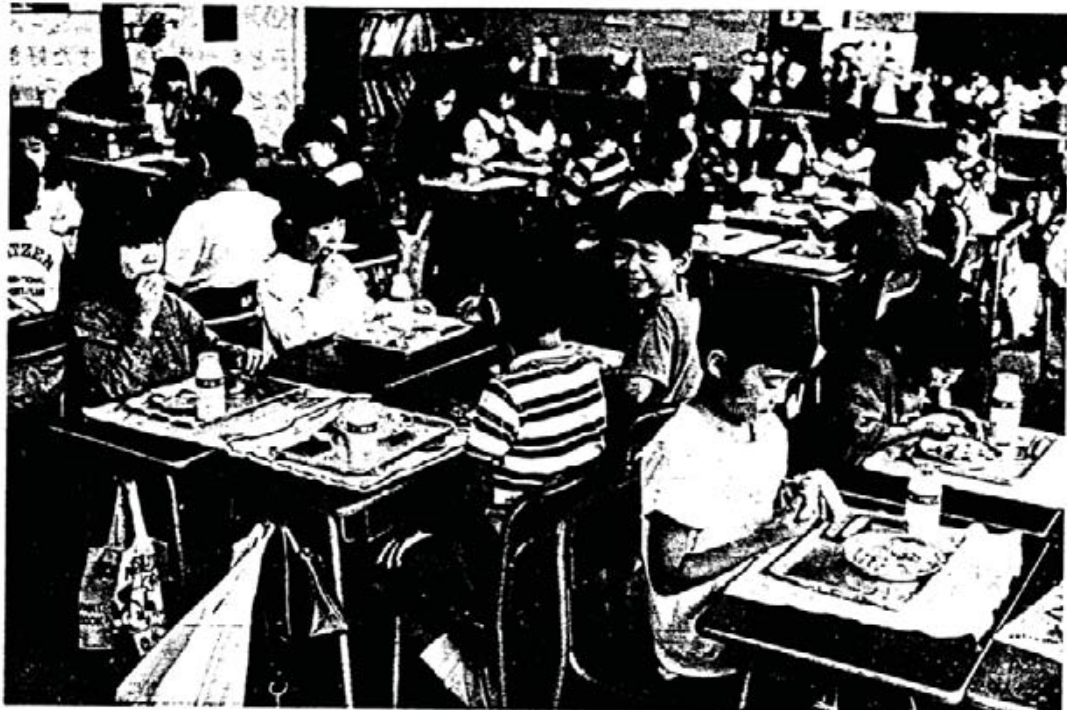
図24 嫌いな物が食べられない友だちがいたら

| | 無理して 食べなくても いいよ | せめてひと口 くらいは 食べよう | (%) 無理して 食べよう |
|-----|-----------------------|------------------------|---------------------|
| 全 体 | 23.6 | 67.8 | 8.6 |
| 男 子 | 24.4 | 61.9 | 13.7 |
| 女 子 | 22.7 | 74.5 | 2.8 |
| 4 年 | 22.0 | 69.2 | 8.8 |
| 5 年 | 20.4 | 71.7 | 7.9 |
| 6 年 | 28.0 | 63.1 | 8.9 |

図25 食べるのが遅い友だちがいたら

| | 急いで 食べなくても いいよ | 少しでも 早く 食べよう | (%) みんなと 同じスピードで 食べよう |
|-----|----------------------|--------------------|--------------------------------|
| 全 体 | 45.6 | 47.2 | 7.0 |
| 男 子 | 46.2 | 42.6 | 11.2 |
| 女 子 | 45.4 | 52.5 | 2.1 |
| 4 年 | 42.9 | 48.8 | 8.3 |
| 5 年 | 47.9 | 46.9 | 5.2 |
| 6 年 | 47.5 | 45.6 | 6.9 |

4. 子どもの給食観



以前の給食は、決しておいしいと言えるしろものではなかった。しかし、子どもたちにとっては、学校生活の中で最も楽しいひとときだったように思う。では、現代の給食はど

うであろうか。子どもたちは給食をどうとらえているのであろうか。本章では、子どもたちの給食観を探ってみることにする。

✿✿ 子どもたちの食事観 ✿✿

給食観に入る前に、もっと広い視点に立って、子どもたちの食事観をまず探ってみることにしよう。

図26の①～⑥は、食事に関する意識や行動をそれぞれみたものであるが、①の栄養観から⑥の間食の回数まで、その結果だけを読みとってみると、次のようになる。①からは、食事のときに、栄養のことを考える子どもが24%いることがわかる。②からは、甘い物を食べないように心がけている子どもは、36%であることがわかる。さらに③からは、太り

すぎに気がつけている子どもが40%いることがわかる。

ここまでの①～③をみる限り、多くの子どもたちは、食事に対して特別な配慮をはらっていないように思われる。しかし、子どもにとっては、それが当たり前のことかもしれない。たしかに甘い物を食べない方が、健康上よいことには違いないが、健康を考えて大好物の甘い物を食べないようにすることの方が、子どもにとって不自然なことのような気がする。そう考えると、甘い物を食べないように

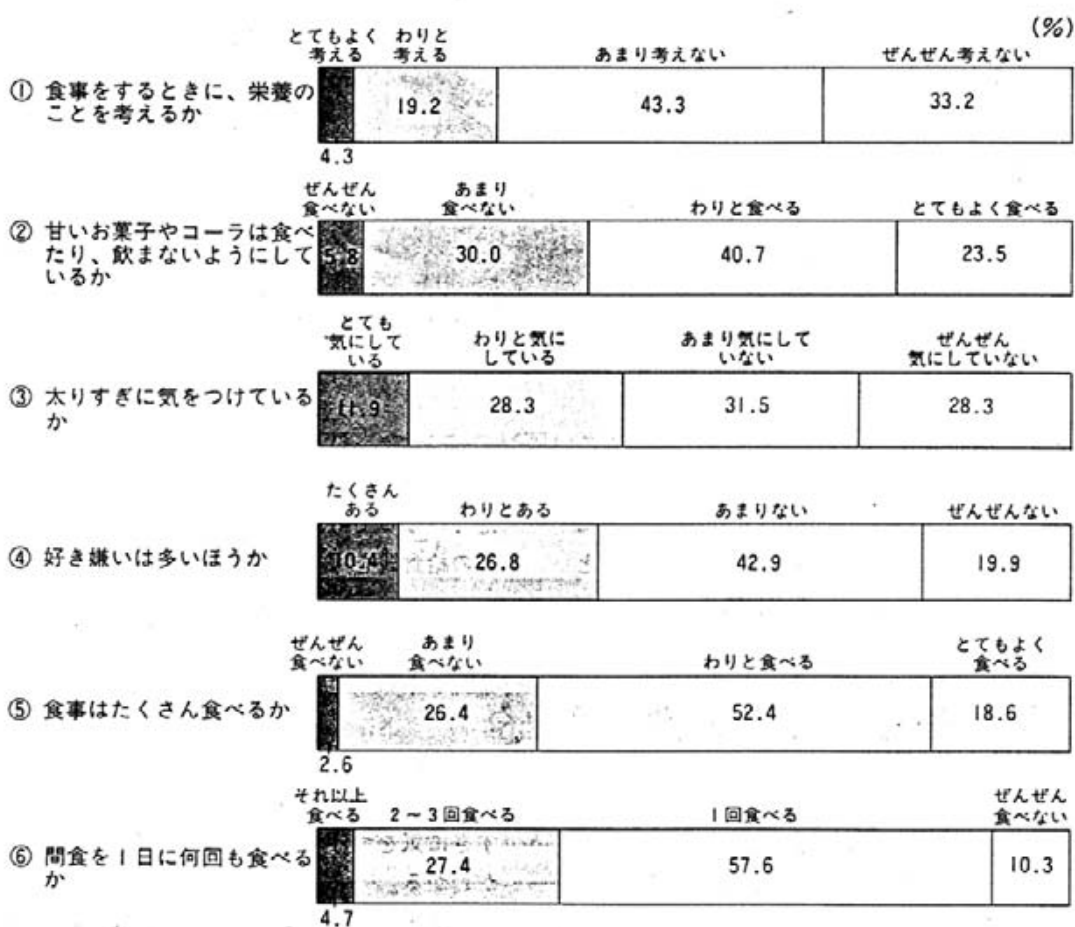
している子どもが36%いることや、太りすぎに気をつけている子どもが40%いることは、やや気にかかるところである。

データにもどるが、④からは、37%の子どもが好き嫌いがあることがわかる。⑤からは、29%の子どもが少食であることがわかる。最後の⑥からは、間食を1日に2回以上する子

どもが32%いることがわかる。

ここまでの結果をもう一度まとめてみると、次のようになる。太りすぎなど、食事に対して過敏になっている子どもが約3割、また好き嫌い・少食・間食などの問題のある子どもも3割前後いることがわかった。

図26 食事観



❀❀ プラスの評価が多い給食観 ❀❀

図27は、子どもたちの給食観についてみたものである。①は、給食前におなかがすいているかどうかたずねた結果である。おなかがすいていると答えている子どもは、73%とさすがに多い。しかし、「とてもすいている」だけをみると25%にすぎない。飽食の時代を端的に物語っている数字といえよう。

②以降のグラフは、「給食はおいしいか」「給食の量は」「栄養のバランスは」など10項目にあたって給食に対する一種の評価を行っている。まず、②では「給食はおいしいか」とたずねているが、86%の子どもが「おいしい」と答えている（「とてもおいしい」と「わりとおいしい」を加えて）。次いで、③では給食の量についてたずねているが、61%が「ちょうどよい」と答えている。同様に④～⑩の項目でもプラスの評価が60%から90%を占めており、子どもたちは給食に対してかなりプラスの評価をしていることがわかる。特に、⑧の「給食の時間は楽しいか」という質問に対しては、89%が「楽しい」と答えているのが印象深い。

では子どもたちは、手ばなしで給食に賛成しているかということ、そうとはいえない。例えば、⑩の「子どもたちの好きな献立か」をみてほしい。「とても思う」と「わりと思う」を加えると63%にも達するが、「とても思う」だけだと20%である。他のどの項目も、「とても」にあたる部分は、そうは高くないので

ある。

次の図28は、給食観の性差をみたものである。図中、上の棒グラフが男子を、下の棒グラフが女子を表している。なお数値は、給食に対してプラスな評価をしている部分だけ取り出してある。②を例にとるならば、「とてもおいしい」と「わりとおいしい」を加えた数値である。

結果は、①、③、⑦、⑨である程度の差がみられたが、全般的には、大きな差はみられないといえよう。

では子どもたちの給食観は、何によって左右されているのであろうか。クロス集計をもう少し探ってみると、前の図26の食べ物の好き嫌いに関連が強いことがわかった。

図29は、給食観が食べ物の好き嫌いによって、どう変化するかみたものである。なお図中の数値は、性差で取り上げたのと同じ、給食に対してのプラスの評価の部分である。図をみると、実線の好き嫌いが「ぜんぜんない」子どもたちの方が、破線の「たくさんある」子どもたちより、どの項目でも数値が高いことがわかる。しかも⑩の「給食は子どもたちの好きな献立か」にいたっては、30%以上もの差がみられる。ここまで数値に差がみられると、食べ物の好き嫌いが、給食嫌いの子どもを生みだしているといっても過言ではなかろう。

図27 給食観



図28 給食観×性差

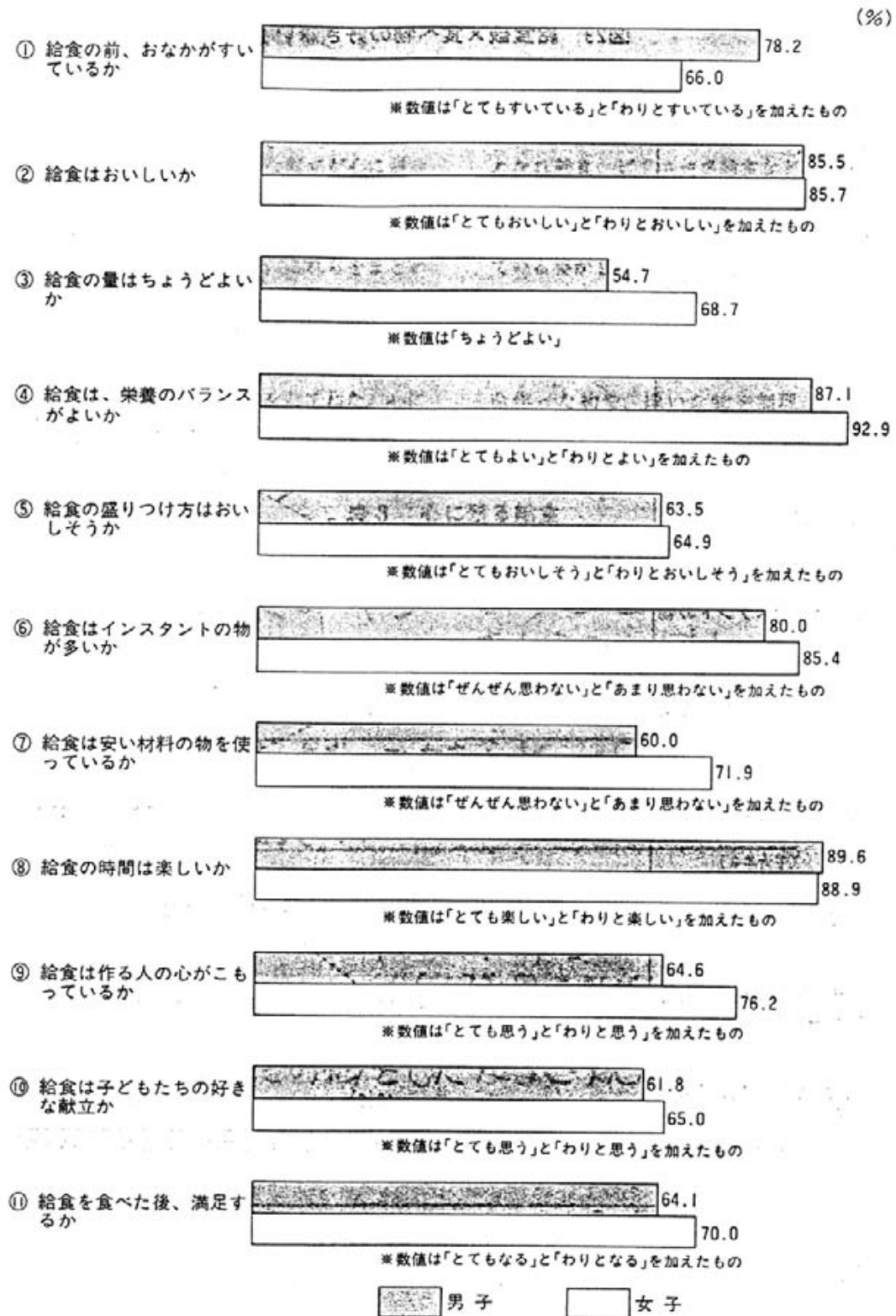
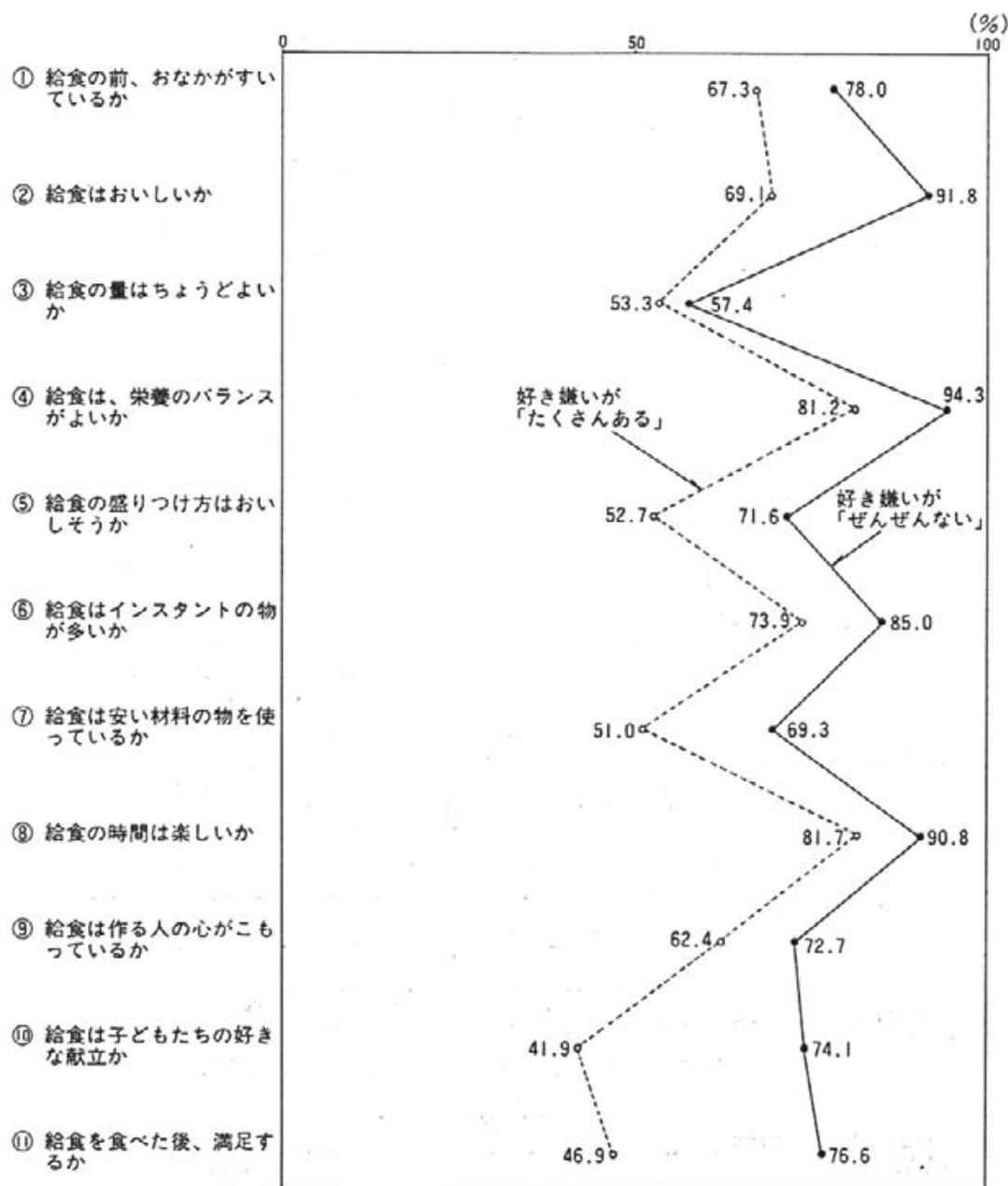


図29 給食観×食べ物の好き嫌い



*数値は図27でとりあげたもの(給食に対してプラスなもの)

❀❀ 心に残る給食 ❀❀

給食への子どもたちの評価は高かったが、今までの給食の中で、どんな献立が心に残っているかたずねてみた。表3にそのいくつかを紹介してみた。給食としては、豪華で子どもの好きそうな内容である。これらをまとめた結果が表4である。男女ともケーキが出たときが一番心に残り、以下、ローストチキン、カレーと続く。

表5で、心に残った理由をたずねた。心に残った理由は様々だが、マラソン大会のとき

のおしるこやクリスマス給食でのケーキ、おわかれ給食、ピクニック給食など特別な日の給食の思い出が多かった。給食を作る人たちが、少しでも給食を魅力的にしようと努力している姿が目には浮かんでくる。

子どもたちは、何も豪華な食事だけが思い出に残っているわけではない。ただの「おにぎり」でも地震が発生し、先生たちが一生懸命作った物や、嫌いな物を無理して食べたとき、今まで一度も食べたことがない物が出

表3 心に残る給食

フライドチキン、いちごゼリー
たまごスープ、まぜこはん

(6年男子)

五目ずし、牛乳、ひなあられ からあげ
野菜、はさく。

(6年女子)

手巻きずし、9時、6年生と食べた。
(1、2年の時 きょうしやくほうたい会を)

(5年女子)

たいやきの形をしたたまご焼き。
ビンのヨーグ

(5年女子)

チョコレートハート スパゲティ
しょくぱん あじフライ

(6年男子)

できたことなども忘れられないことらしい。
 では、このような給食体験がどのくらいあるのだろうか。図30をみてみよう。「今まで嫌いだった物が食べられるようになった」から「今までに1度も食べたことがない物が出てきた」までの5項目についてたずねたが、このような体験が、何回もあった子は2～3割である。だが④の「給食で食べてから嫌い

になってしまった」をのぞいた他の4項目では、6～7割の子が少なくとも1～2度以上は体験している。このような体験は、今の家庭ではなかなかできにくくなってきていると思えるだけに、同じ物をみんなと一緒に食べる給食は、子どもたちにとって貴重な体験の場といえるかもしれない。

表4 心に残る給食

| 順位 | 男の子 | 女の子 | 4～5年 | 5～6年 | 6～7年 |
|----|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 | ケーキ | ケーキ | ケーキ | ケーキ | ローストチキン |
| 2 | ローストチキン | ローストチキン | カレー | ミルク | ケーキ |
| 3 | カレー | カレー | ローストチキン | 焼きそば | あげパン |
| 4 | ミルク | 焼きそば | アイスクリーム | カレー | カレー |
| 5 | 焼きそば | ゼリー | 焼きそば | ローストチキン | まぜごはん |
| 6 | まぜごはん | アイスクリーム | ゼリー | クレープ | クレープ |
| 7 | クレープ | クレープ | うなぎ | まぜごはん | 焼きそば |
| 8 | あげパン | ミルク | そうめん | アイスクリーム | ミルク |
| 9 | アイスクリーム | まぜごはん | クレープ | ゼリー | ハンバーグ |
| 10 | スパゲッティ | スパゲッティ | ミルク | ハンバーグ | スパゲッティ |

表5 心に残った理由

○1年生のときの「牛乳とバナナ」

いちばんさいしょだから。

(4年女子)

○「おしるこ」

マラソン大会でつかれているとき、おしるこがおいしいから。

(4年男子)

○クリスマス給食のとき

おいしかったし、おかしやケーキがでると思わなかったから。

(6年女子)

○6年生とのおわかれ給食のとき

6年生がきて、いっしょに食べたから。

(5年女子)

○ピクニック給食のとき

みんなでいどうして、おきなほしにいいから。

(5年男子)

表5 心に残った理由

○リクエスト給食のとき

じぶんできめたものができたから。

(6年女子)

○臨時の「おにぎり」のとき

去年12月の千葉県東方沖地震でカールがた
まれダメになったかわりに、先生たちがひ
つしになって作ってくれたから。

(4年男子)

○嫌いな「肉ジャガ」のとき

さういなのに一むりに
食べた。
さういなものがたくさん
はいてる。

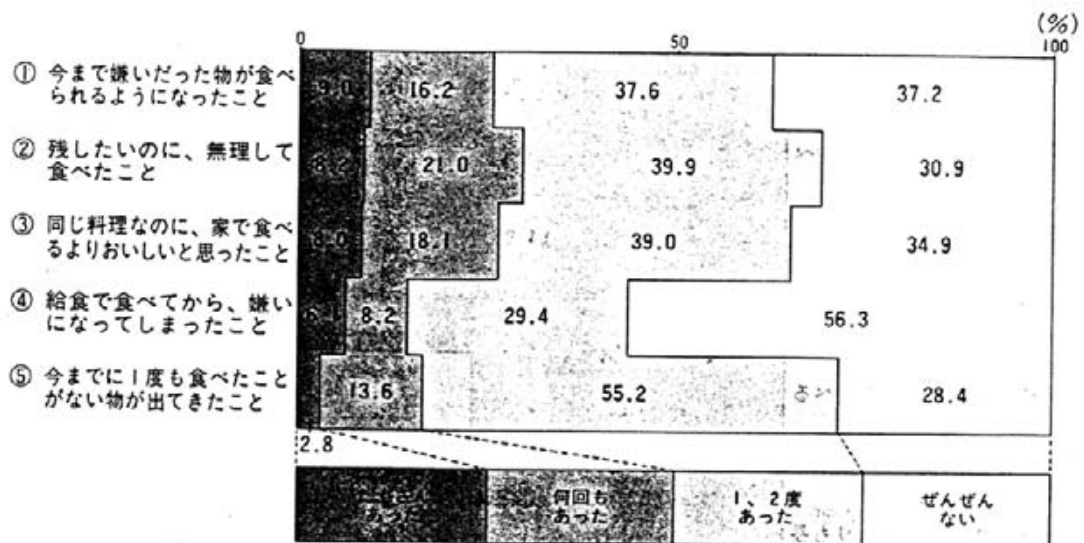
(6年女子)

○初めて「ウメシバ」を食べたとき

今までまずそうだな。と、思っていて、友達
と食べてみたらとてもおいしかったので、
それをお店で買って食べた。

(4年女子)

図30 給食での体験



もっと自由な給食を

給食観の最後として、子どもたちがどんな給食を望んでいるのかみてみたい。

図31は、どんな給食が楽しいかという形で、子どもたちの理想の給食像をみたものである。まず第1位にランクされたのは、「好きな友だちと食べる」の95%（「とても楽しい」と「わりと楽しい」を加えて）である。次いで、第2位は「自由に話をしながら食べる」の94%である。以下「自分の好きな献立のとき」(94%)、「給食の献立を自由に選べる」(89%)と続く。逆に人気がないのは、⑬の「上級生と下級生が同じグループで食べる」(38%)、⑭の「静かな音楽をききながら食べる」(33

%)といった研究校などで現在も比較的行われているような給食のスタイルである。

これら上位に並んでいる項目をみると、子どもたちが自由を欲していることがよくわかる。給食中のきまりについては、第2章で述べたが、もう少し緩和する方向でもよいのではないだろうか。

なお図32は図31の性差をみたものである。

⑥「お弁当持ち」、⑦「ゆっくり食べたい」、⑨「食堂のような所で」、⑩「レストランで使われているような食器で」、⑪「先生と一緒に」といった項目で、女子の方が上まわっていた。

図31 どんな給食が楽しいか

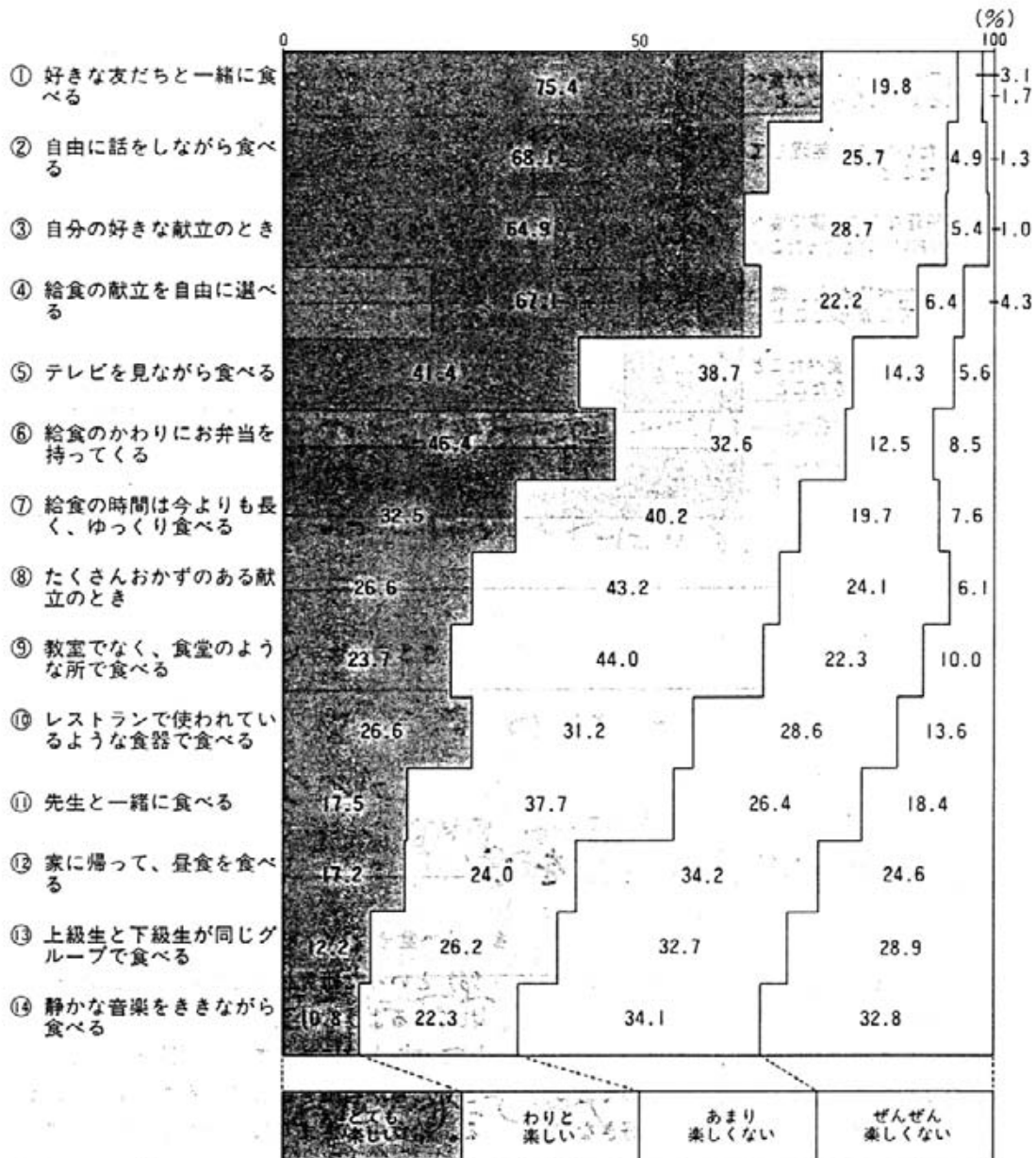
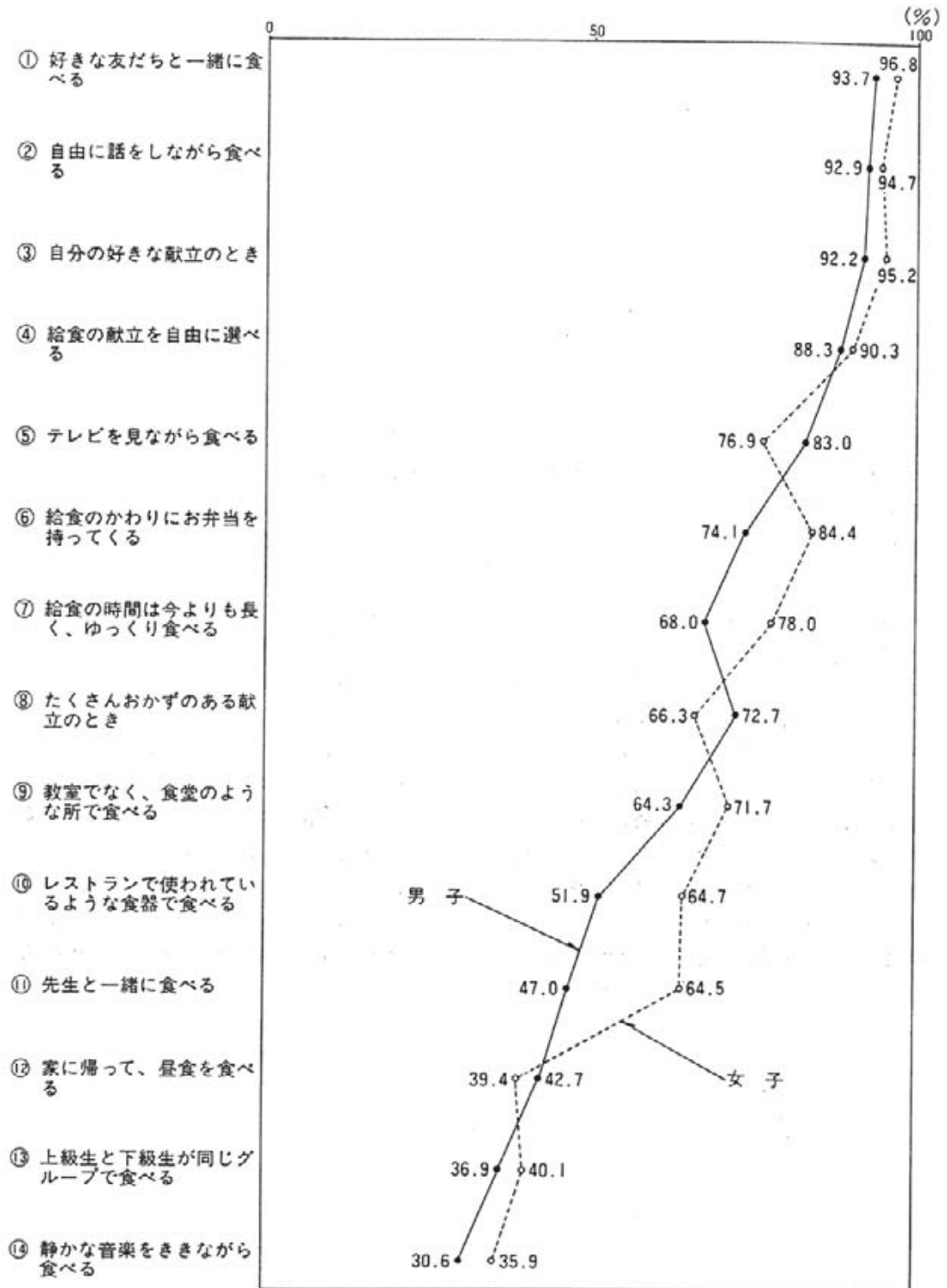


図32 どんな給食が楽しいか×性差



※数値は「とても楽しい」と「わりと楽しい」を加えたもの



まとめに代えて

数年前、給食室改築のため半年間お弁当になったことがあった。明日からお弁当だと言うと、子どもたちから「ワーイ、ワーイ」と歓声が起こり、「ねえ、ねえ、お弁当のおかず何にする」「わたしは、ハンバーグにしようかな」と教室のあちらこちらから楽しそうなはずんだ声が聞こえてくる。そしてお弁当第一日目、この日は朝から子どもたちの顔は浮き浮きし、いざ給食時間になると、みんな誇らしげに弁当箱のふたを開いた。どのお弁当も子どもの好きな物はもとより、嫌いな野菜も巧みに取り入れ、色どり鮮やかに、栄養のバランスも十分に考えて盛りつけられていた。

食事が始まると、「これ、お母さんと一緒に作ったの」「ぼくは、買い物に行ったよ」「ハンバーグとからあげを取りかえようか」といった会話があちらこちらでかわされていた。親と子のふれあう姿がこの給食風景の中にくっきりと浮かび上がり、給食をやめてこ

れからお弁当にすればいいなとさえ思った。

しかしこの状態は、1か月と続かなかった。時がたつにつれ、弁当箱を開く子どもたちの顔はさえなくなり、中身も次第にできあいの物が増えていった。「先生、カップラーメン持ってきていい」と聞く子も現れ、その後、各種ふりかけの大流行が起こった。「やっぱり給食の方がいいや」という子が日増しに増えていった。「どうして給食の方がいいの」と聞くと、「お母ちゃんが、『ああ、またお弁当か』って大変そうなんだもん」「すぐ、お母さんとおかずでけんかしちゃうんだ」「お弁当は、あんまりおかずが変わんなくてあきちゃった」「やっぱり、あったかい給食の方がいいな」「給食はたっぷりおかわりできるから」と様々な理由を述べた。

最近、給食をなくし、お弁当にした方がいいのではないかという意見を耳にする。母親の手作りのお弁当が、親と子とを結びつける



愛の絆になるということである。しかし今後、働く母親が増えていくことを思うと、やはり、学校給食をなくすわけにはいかないと思う。だが、子どもたちと一緒に給食を食べていると、今の給食のままでよいとはとても言えない。

学校給食の位置づけ方はいろいろあるだろうが、何も子どもたちにぜいたくをさせろということではない。データをみると食事内容は、以前に比べ改善が図られているようだが、情操を豊かにし、人間性を育てる食事のあり方をもっと考える必要があるだろう。子ども自身、好きな友だちと自由に話しながら食べられたら楽しい給食になるだろうと思っている。今の給食は、子どもが求めている人間的なつながりの場を保証していないのである。教師側にしても、「ああ、もっとゆっくり自由に食べさせたい」と思っても、学校の過密スケジュールを思うと、「しゃべらないで、静かに、早く食べなさい」という言葉が口に

出てしまうのであろう。たとえ料理は質素でも、友だちとおしゃべりをしながら食べることにまさるものはない。ゆったりとした雰囲気の中で、気軽に会話をかわしながら友だちと食事を楽しむ。そうした食事を通して、子どもたちの人間性は培われ、お互いを理解し結びつけていくのである。

最近では、家庭でひとり淋しく食事をする子どもが多いといわれている。社会はもとより、学校においてさえ、失われつつある人間的つながりを回復させる方向において、新しい給食のあり方を追求していくことが今、大切なのではないだろうか。いっそのこと、アメリカの小学校で多く見られるようなカフェテリア方式にして、自由な席や献立が選べるようにしたら、子どもたちの願いもかなえられそうである。こういった可能性も、21世紀の給食を考える上で、検討していかなければならないだろう。